資　料

資料 1 :「後醍院真柱造士館助教辞令」 …… 133
資料 2 :『成形図説』 …… 134
資料 3 :「明治8年3月4日付朝野新聞」 …… 135
資料 4 :「南部弥八郎報告書」 …… 136
資料 5 :「喜入家十七代大概之譜・十八代履暦荒増」 …… 138
資料 6 :「守屋納一郎日記」 …… 139
資料 7 :「英中隊運動図」 …… 140
資料 8 :「伊藤祐徳日記」 …… 141
資料 9 :「西南戦争密偵報告」 …… 142
資料 10 :「教育関係書留帳」 …… 143
資料 11 :「月野村非常日誌」 …… 144
資料 12 :「明治10年9月3日付読売新聞」 …… 145
資料 13 :「明治11年2月14日付読売新聞」 …… 146
資料 14 :『薩摩見聞記』 …… 147
資料 15 :「三津分限帳 諸国大福帳」 …… 148
資料 16 :「二ノ方良右衛門講義録」 …… 149
資料 17 :「賦板」 …… 150
資料 18 :「勝姫手向草」 …… 151
資料 19 :「二之丸奥右筆問日記（二之丸奥日記）」 …… 152
資料 20 :『和訳英辞書』（『薩摩辞書』） …… 153
資料 21 :「薩摩政府宛ウィリアム・ウィリス建言」 …… 154
資料 22 :「観光集」 …… 155
資料 23 :「北條巻蔵備忘録」 …… 156
資料 24 :『頴才新誌』 …… 157

資料１

後醍院真柱造士館助教辞令（ごだいいん みはしら）

６ページ

資料のあらまし

国学者の後醍院真柱が，藩校 造士館の助教に任命された辞令。造士館では設立当初，朱子学の講義が行われていたが，第11代藩主 島津斉彬の時に洋学等も奨励され，後に国学も講義に加えられた。

【鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵】

資料

解説

当該史料は，万延元年（1860年）4月，後醍院真柱が造士館の助教に任命され，役料として米75俵を与えられた辞令。後醍院は，安政５年（1858年）に造士館の訓導師に任じられ，斉彬に国学の講義を行った。造士館の教官は，教授以下，助教，都講，句読師，訓導師と続き，助教は最高責任者の教授に次ぐ高い地位であった。

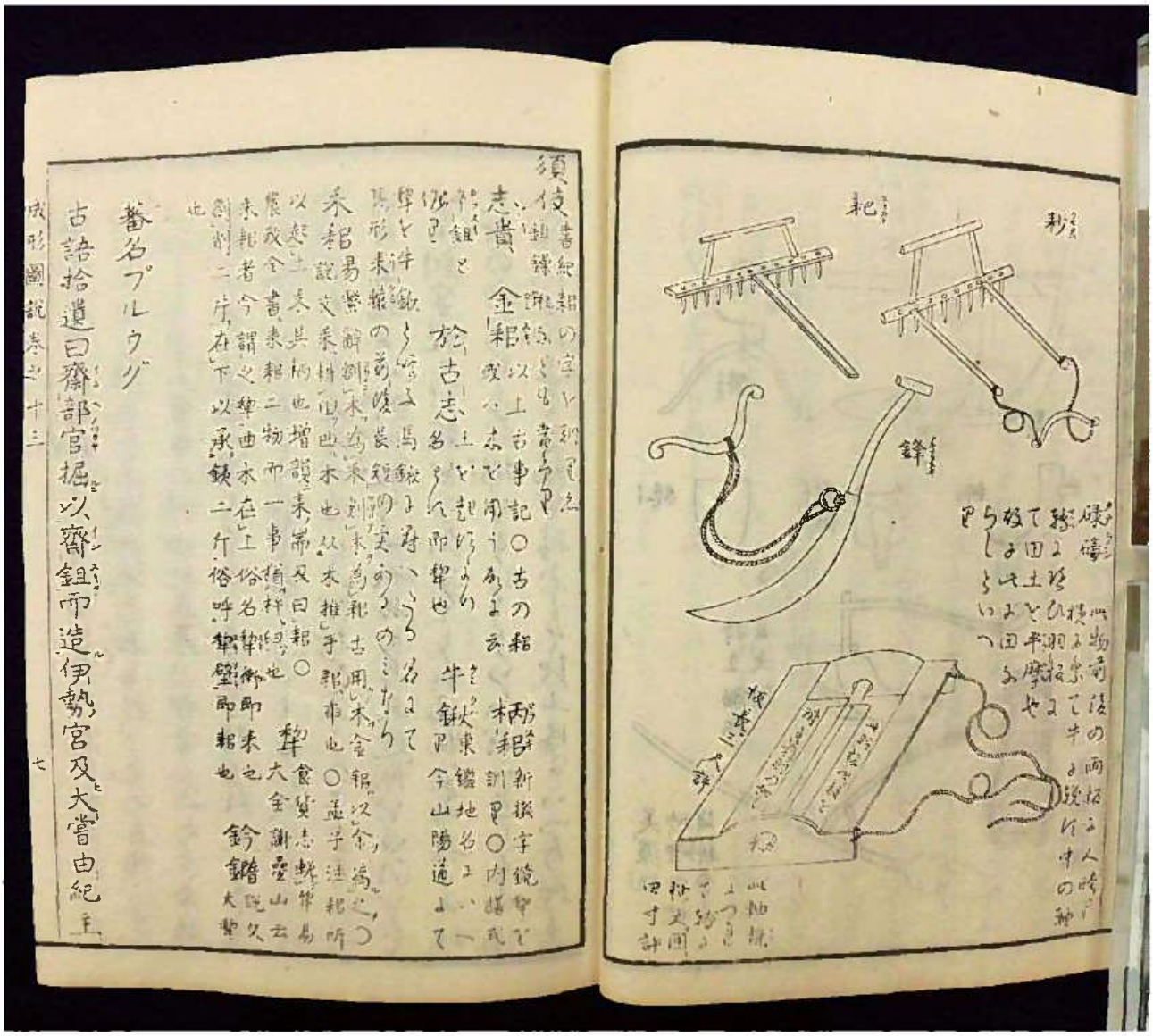
資料2

成形図説

10ページ

資料のあらまし

第８代藩主 島津重豪が編纂させた，農業をはじめとする百科事典。重豪の侍医で外国語に通じた曾槃や国学者の白尾国柱らにより，100巻の予定で編纂が進められたが，編輯所が置かれた江戸藩邸の火災等により，実際には30巻の刊行となった。江戸時代の本草学（現在の博物学に当たる）の一つの到達点といえる。 【黎明館蔵】



解説

掲載部分は，農事部の鋤の項。農具の名称や使用方法などが挿絵入りで説明されている。国内だけでなく外国の農具も記載され，日本での呼び名に加え，「蕃名」（オランダ語の名称）が並記されている項目もある。文化元年（1804年）以降刊行されたもので，薩摩藩で外国の情報が活かされていた一例といえる。

明治8年3月4日付朝野新聞

12ページ

解説

曽於郡襲山郷（現在の霧島市の一部）の郷士 竹下弥平が新聞に投書した憲法草案。明治22年（1889年）の大日本帝国憲法発布の10年以上前に作成されたもので，二院制や立法権の独立など民主主義の思想を取り入れている。

投書

巷ク聞ク我帝國先世聖哲ナル天皇之敕ニ曰天君主ヲ設クルハ以テ國民ノ爲ニスルノミ君ノ爲ニ人民ヲ置クニ非ズト支那之先哲亦曰天下ハ天下之天下ニシテ一人之天下ニ非ズト歐洲之古語ニ又云ク吾國ハ愛スベシ吾人自由之嚊ハ吾國ヨリモ愛スベシ

ツバトリア、カーラ、カーリタル、リベルタス」或ハ譯レテ「吾身可舞吾國不可舞吾國可舞自由之嚊不可舞也ト云」吾幼時此數語ヲ聞キ窃カニ怪ミ以爲ク此等之嚊ハ則嚊矣然レトモ理必レモ行ハルベカラズ吾國苟不世出之英雄創ニ非ルヨリハ安ゾ能ク二千五百年來之常習ヲ勇敢淳流レテ此數語所謂其理ヲ實行ニ背見スルヲ得ンヤト既ニシテ戊辰ノ御覆ニ會シ逆賊暫之陋態義兵鋒鏑之下ニ一掃レモ盡キ海内一變洋溢蜂起方興ヲ更ノ縣治ニ版ス此ノ時ニ當リテ所謂萬機公論ニ決スル云々等之聖哲ハ即數多クモ爲ニ所述天地ニ亘リ萬世ヲ究メ不可易其理ニ根據シテ發スル所ノ者ニテ而直ニ此其理ヲ實行ニ施スヲ見ル吾輩幼時之疑惑頓ニ氷釋スルヲ得テ此ニ於テ副自企踵此所謂其理益益暢述敢然來文明之諸國ト并馳共峙ニ至ラン非ヲ豈ニ者茲ニ七年數計ランヤ一昨癸酉五月ハ井上大藏大輔等退職前後ヲ云）以來或機失調スルアルガ如ク等テ巷山ヨリ瓢ク餓城ヨリモ堅シト者人ガ平蕃盤信シタル維新之基礎タル聖哲（パトリア、カーラ―、カーリタル、リベルタス）之大旨ハ頗ル混晦スルモノアルガ如キニ至ラントハ予又怪ミ以爲ク其理果レテ行ハルベカラザルカー既ニシテ民會之隆起ル其得失利害尚早既可評カニ識賢之說アリ又賢スルヲ須タズ吾輩ヲ聞ク聖哲ヲ將ニ湮晦セントスルノ日ニ維持挽回スルモノ民會ヲ舍テ又他ニ求ムベカラズ眞理ヲ將ニ否塞セントスルノ際ニ開闢暢達スルモノ亦民會ヲ舍テ他ニ求ムベカラズ而シテ吾最切望スル所ノ條々ハ左ノ如シ

第一條　已巳半定以來此ニ七年蓄レ國步又一歩ヲ進ノ君子的變スベキハ此ノ時ヲ然リトス故ニ吾帝國宜シク益其國體ヲ鞏固ニ運フレテ我帝國ノ體裁ヲ暢達スベキ憲法典則ヲ鈴定スベシ

第二條　右憲法ヲ定ムルハ即聖哲ヲ擴充スル所以ナリ立法之權ヲ議院（現今之左右院ヲ敢ノ新ニ立ル處ノ左右兩院之議院ヲ云）ニ委任スベシ

第三條　左院之議員定額百員トシ定員三分之一ハ現今各省奏任官四等以下七等ニ至ル判任官八等ヨリ十等マデノ内其主務ニ練達諳熟シテ且才識アル者毎省若干員ヲ人撰（省ノ長官之ヲ撰擧シ定ムベシ）シテ出ス所之議員トス

他之三分一ハ現今衆庶著名ニ知ル所ノ功勞アル人士家勅奏議官公ノ如キ在野ノ俊傑及博識卓見ナル翻譯編地著作中村等新聞家或島柴本等ノ如キ儒先生ヲ撰擧（最初ハ太政官ヨリ命令シテ之ヲ擧クベシ）議院已ニ立ツ後ハ別ニ撰法ヲ立ツベシ）充ル所ノ議員トス

他ノ三分ノ一ハ府縣知事令參事ニ命シテ其管下秀俊老練民事ヲ通曉シ地方ノ利弊ヲ諳悉スル者ヲ撰擧セシム（是モ最初ハ太政官ヨリ地方官ニ示諭シテ慎撰ナキヨウ注意其人ヲ擧シメバ其人ヲ獲ルニ難カラズ其小師月ハ各地方官適宜ニ任スルモ妨ナシ議院已ニ一タビ立ノ後ハ別ニ詳細撰擧法ヲ設クルヲ要ス別ニ論述スベシ）以テ各府縣ノ令參事ト共ニ代議員ト爲リテ出ルモノトス（他日議員ノ撰法整備スルニ至ル迄ハ令參事ヲ并セテ地方議士ニ列セザルヲ得ズ）

第四條　右院ノ議員ハ現在行政官敕任以上及皇族華族中ヨリ撰擧（此モ前第三條ノ撰例ニ同シ）セザルベシ其定額百員ヲ限ル

但司法官ト武官トハ議員タルヲ得ズ

第五條　大政大臣（即行政ノ首官タル重任）及左右大臣ハ左右兩院ノ撰擧ヲ以テ定ムベシ

第六條　左右院ヲ開閉スルハ天皇陛下之特權ニ在リ

第七條　帝國之歳入出ヲ定ムル特權ハ左右兩院ニ在リ

第八條　凡帝國之憲法典則ヲ鈴定スル若クハ更正增減スルハ一切左右兩院之特權ニ在ルヲ以テ假令行政官司法官及武官何樣之威權何樣之時宜アルトモ決レテ立法上ノ權ヲ犯モ干犯スルヲ得ザラシムルハ立國之本旨敢重スル所トス

大昇右ニ述ル冒題ヲ以テ其手段ヲ立テ其方使ヲ爲シ左右議院（民選ト云モ官選ト云モ名目如何ニ拘ハラス唯其實功ヲ要スルノミ）ヲ速ニ設立セラレンヲ今日政府之急務是ヲ舍テ何ソヤ謹啟衆之民洗毅果斷有餘而忠厚溫良不足其弊ヤ君主ヲ感通シ政府ヲ倒制スルモノ往々有之彼「ヒューミレーション」ヲフ、シローウレーン有ル所以也我帝國之民淳樸忠愛有餘而英鋭勇斷不足其弊ヤ朝自卑屈奴隸之習氣腦髓ニ印シテ精神恍惚復醒難キヤカ如キニ至ル彼之印度ノ奴ト爲リシモ亦職トレテ是之由ル今ニシテ早ク之ヲ悅何セザレバ印度之覆轍ヲ踏ザルモノ繼希ナリ夫外國人ト婚娶ヲ許スガ如キ出版ヲ自由ニスルカ如キ學校ヲ盛ニスルガ如キ兵力ヲ張ルカ如キ拷掠ノ苛酷ヲ除キ審判之傍聽ヲ設ニスルガ如キ瀛東山川ヲ縮ノ電線宇宙ヲ縛スルガ如キ皆開化之衆股肱ニ非ザルハナシ然レトモ徒ニ其股肱ヲ獲テ而未タ其精神ヲ具セザンバ偶人埴像ニ均レキノミ獨ニ見ロ三千五百万兄弟中能ク毅然自立（假令吾國ハ可尊共吾自由之理ハ不可奪也）ノ志氣見解ヲ存スルモノ果レテ幾人ヲ吾輩故ニ曰聖哲之大冒涜晦此ニ至ル寔ニ怪且痛哭ニ堪ヘザル也之ヲ救濟スルノ道他ナシ唯左右議院（前名條述スル所ノ者ヲ云ンヲ建テ以テ大ニ自主自由之理ヲ擴充暢達スルニ在ル而已

鹿兒島縣下大隅國曽於郡
襲山郷住居愛國愚夫
竹下彌平

明治八年二月一日謹述

資料4

南部弥八郎報告書

24ページ

資料のあらまし

薩摩藩の探索方 南部弥八郎から藩に提出された西洋諸国等の情報に関する報告書。島津久光の下に集められた史料群「玉里島津家史料」に約130冊含まれる。『鹿児島県史料 玉里島津家史料補遺 南部弥八郎報告書』(全２巻)として，平成14年及び15年に鹿児島県（黎明館）が翻刻，刊行した。明治維新研究の第一級の史料として高い評価を受けている。

◇第三四号　亥七月十一日報告（「玉里島津家史料」二巻六一五）

一

千八百六十三年第八月廿一日（我七月八日）於横浜記ス

神奈川奉行台下に呈す

我不列顛の軍艦、上海より当港江来れるの中路ニ而曩に薩州にいたりし軍船の一艘に逢ひ、当港に着せしにより新聞を得たり、之を大君政府に報告すべきが為なり、

我国の軍艦七艘、既に当港を発し第八月十四日（我七月朔日）鹿児島にいたり、薩の官吏も来り、諸般了簡ニ而都而申立之趣意ニ済すべきの談判あり、然るに本月第十五日（我七月二日昼後）昼十二時不意に砲発に逢ひ、無拠戦争に及ひたり、細事は海軍総督不日帰来之上可報告なれとも、左ニ新聞を記して以て報告す、敬白、

二

千八百六十三年第八月廿一日横浜新聞（我七月八日）

英国軍船コロモランド、書状を以て当港江只今着せり、右船鹿児島に在る英国軍艦ニ逢ひ、次の新聞を持参せり、去ル土曜日（七月二日）第十二時（昼時なり）軍艦鹿児島の港に碇泊しありて大風吹く、日本人より不意ニ発砲せり、不幸にして次の人々殺亡せり、

カピテイン船将ジョンスリング人名

コンマンドル隊将ウヰルモット人名

右両人一の丸にて打殺さる、外手負・死人六拾人、船には多少損傷す、英船当港江帰来る近ニ在り、

巨細に記するを得す、其大略を載す、当十五日第十二時台場より打出す、水師提督直ニ合図を為す、

日本船三艘を焼く、捻仕懸之蒸気船也、

船号

エンゲランド　シルシヤルシレイ

コンテスト（横浜又は長崎にて買入たる薩州の船也、）

右日本船は其朝に成りて軍艦の傍に碇泊せり、

台場より打掛たるを以軍艦碇を上ケ、台場より五百乃至六百ヤルト二尺余離れて一列に連れり、

台場より射る事甚た強く、殊に大筒にして其内六十乃至七十挺は十インチ（一尺余也）の破裂丸、又三十二斤乃至二十四斤の実丸也、

カピテイン并コンマンドル（前に名を載す）は午後第二時五分（秒カ）五抄の頃甲板檣上（船の高きところ）にて一弾丸の為に死す、

又十インチの破裂丸甲板の中央に而破裂し、水夫七人即死し、手負の者水夫五人、ロイテナント　ヂョンス（訳者云ふ、右はユラレス船の事也、）宅人也、

天気悪く雨ふり、風陸の方に向て吹く、午後第三時火府中に起る、第三時二十分発砲止む、

第九時二十分に造作場及ひ商家焼る、

第八月十六日七月三日午後第三時三十分に碇を上ケ、蒸気に而港口に出懸、府台場に向て打てとも（破裂丸又は実丸）只答る者は台場二ケ所のミなり、碇泊せる所は台場より丸の遠せさる所なり（訳者云、二度目に、かゝりたる所也）

府は夜半、尚焼けてあり、

手負・死人目録

一ユライリス船　死人十人　手負廿一人内一人死ス

一ペール　〃　七人内一人士官

一アルゴス　手負三人

一コッケット　死人一人　手負六人（内一人ロイテナント内一人死す）

一ペルシウス　〃　一人　手負二人

一ライスホース　手負二人

一コアック　無之

資料

解説

南部弥八郎は，幕末期に薩摩藩に探索方として雇われ，横浜の居留地で発行されている英字新聞の翻訳を入手し，また，幕府の洋書調所（しらべしょ）の学者などから西洋諸国等の情報をはじめとするあらゆる情報を精力的に収集し，薩摩藩に報告した。

掲載部分は，横浜の居留地で発行された英字新聞の翻訳で，薩英戦争の顛末，戦果，被害状況（各軍艦の死傷者数）を報告したもの。

資料5

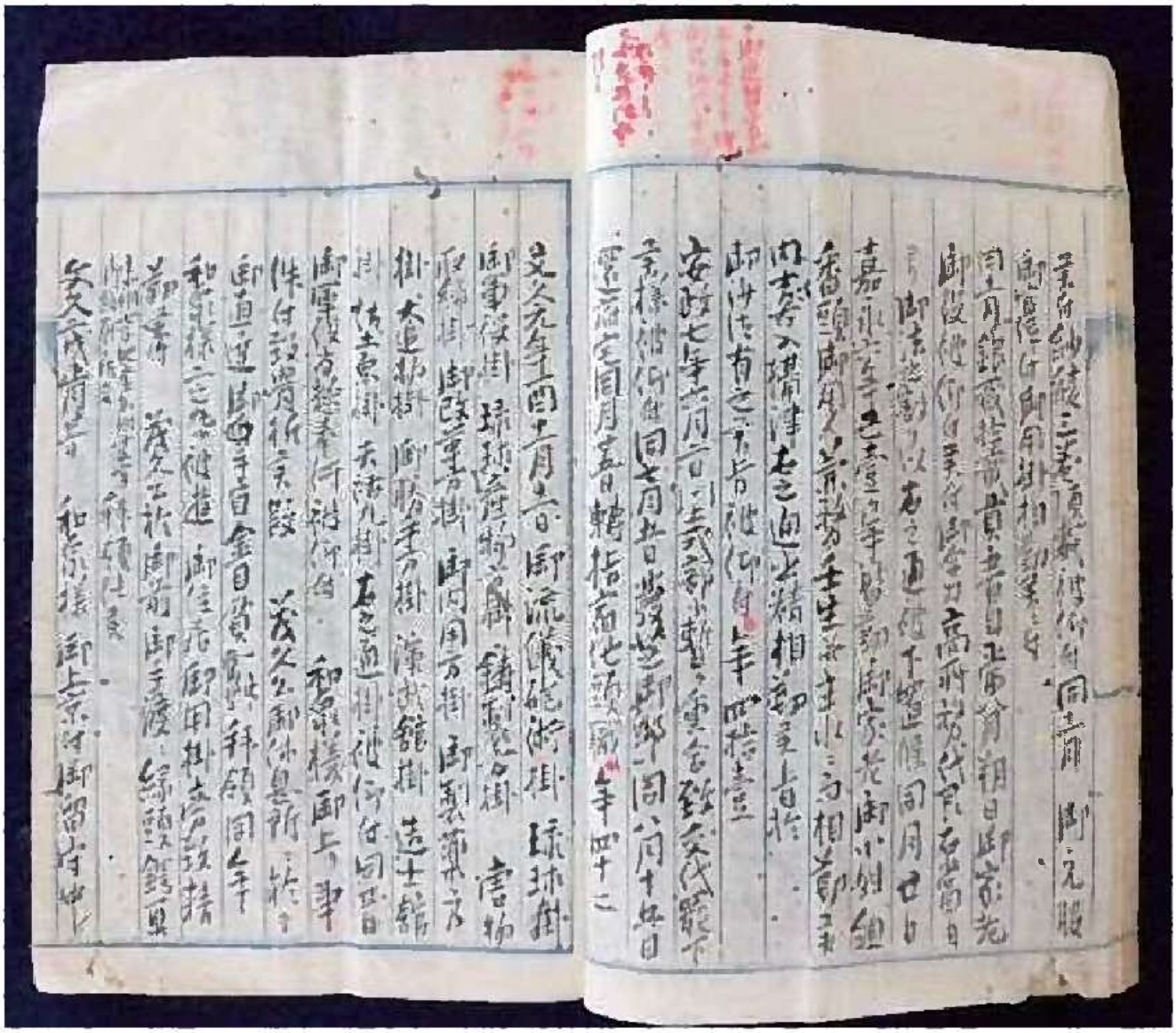
喜入家十七代大概之譜・十八代履暦荒増

36ページ

資料のあらまし

喜入家当主の履歴・功績などを記したもの。これまで，あまり注目されなかった喜入久高の幕末維新期における役割などを知ることができる。

【枕崎市文化資料センター南溟館蔵】



解説

喜入久高は，島津家の支流である鹿籠（現在の枕崎市）領主 喜入家の第18代当主。島津久光に登用され，首席家老として小松帯刀らとともに久光を支えた。

掲載部分は，文久元年（1861年）11月11日付けの記録で，琉球掛，御軍役掛，鋳製方掛，唐物取締掛，造士館掛といった重職に任命されたことなどが記述されている。

資料6

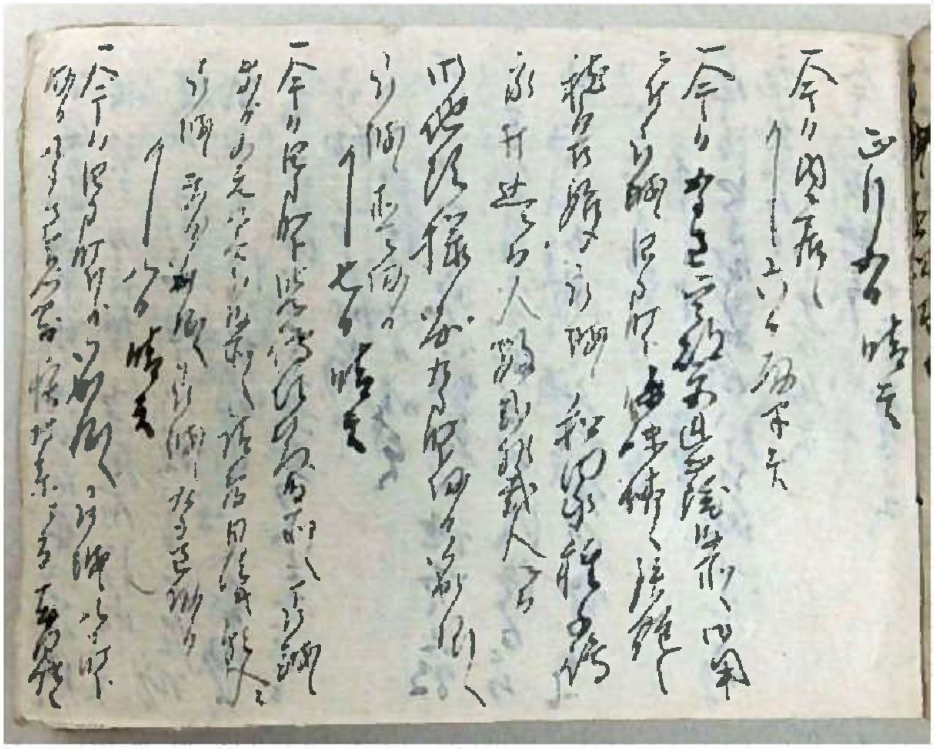
守屋納一郎日記

41ページ

資料のあらまし

文久4年（1864年）から明治2年（1869年）までの高山郷（現在の肝付町の一部）郷士の日記。郷士年寄など郷の指導層ではない郷士の生活の様子が分かる史料。

【守屋泰造氏蔵，黎明館保管】



解説

掲載部分は，慶応3年（1867年）正月の日記で，6日にはこの年最初の調練が始まったことなどが記されている。筆者の守屋納一郎は，高山郷の郷士年寄を勤めた守屋舎人の親戚に当たる。一般の郷士は耕作もしていたため，農村の様子も分かる史料である。

資料７

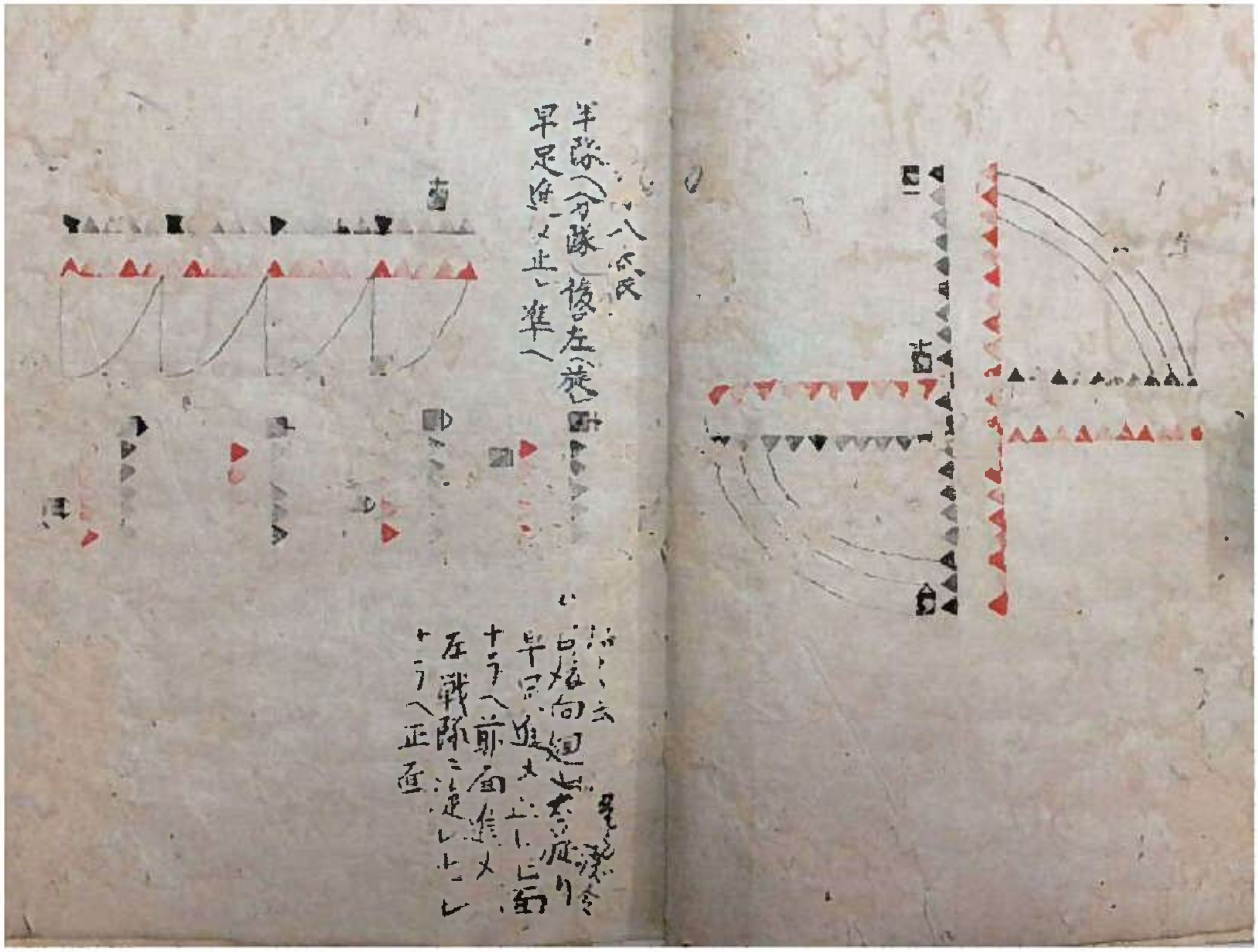
英中隊運動図

42ページ

資料のあらまし

伊作郷（現在の日置市吹上町伊作）における，歩兵の洋式訓練に関する史料。年代は記載されていないが，文久３年（1863年）の薩英戦争後の史料と考えられる。

【日置市吹上歴史民俗資料館蔵】



解説

掲載部分は，整列して行進する際，直角に曲がる場合は外側の者が大回りをするなど，歩兵の行進の方法を図示したものである。

資料8

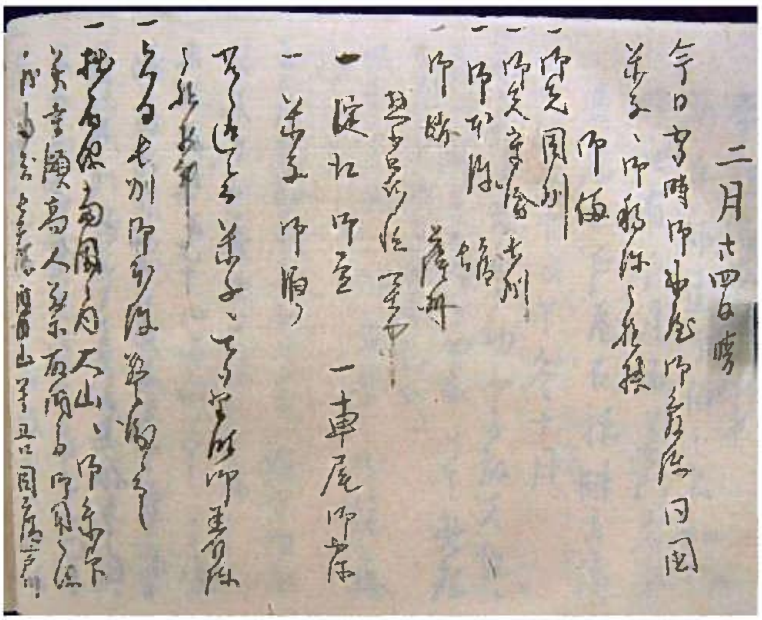
伊藤祐徳日記

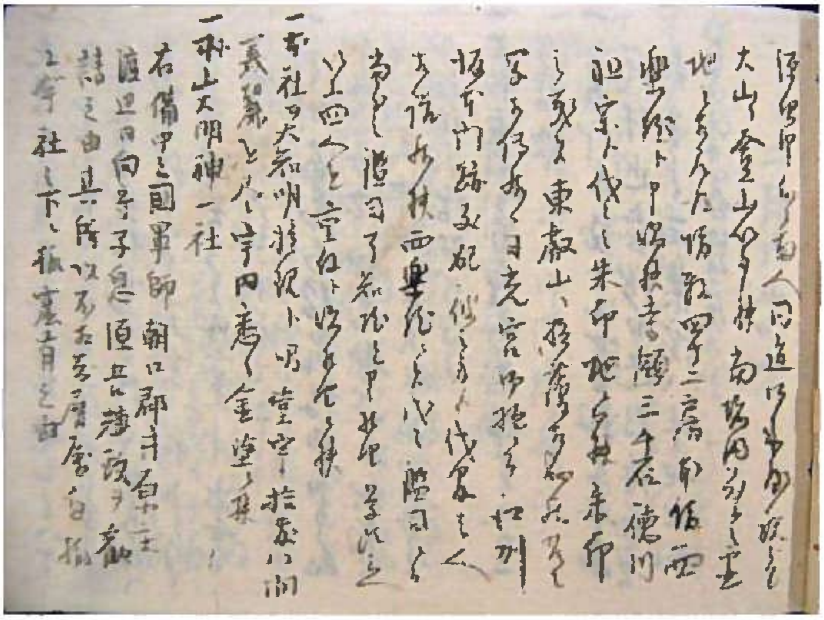
44ページ

資料のあらまし

出水郷（現在の出水市）の伊藤家に伝来した史料群で，現在は一括して黎明館に寄託されている。平成14年に黎明館において企画展「ある郷士の生活～出水伊藤家資料の世界～」が開催されるなど，質・量ともに極めて優れた郷士の史料と評価されている。

【個人蔵，黎明館保管】





解読

掲載部分は，明治元年（1868年）の日記で，山陰道鎮撫総督の西園寺公望の参謀として伯耆（現在の鳥取県）の大山に赴いた時のことが記述されている。

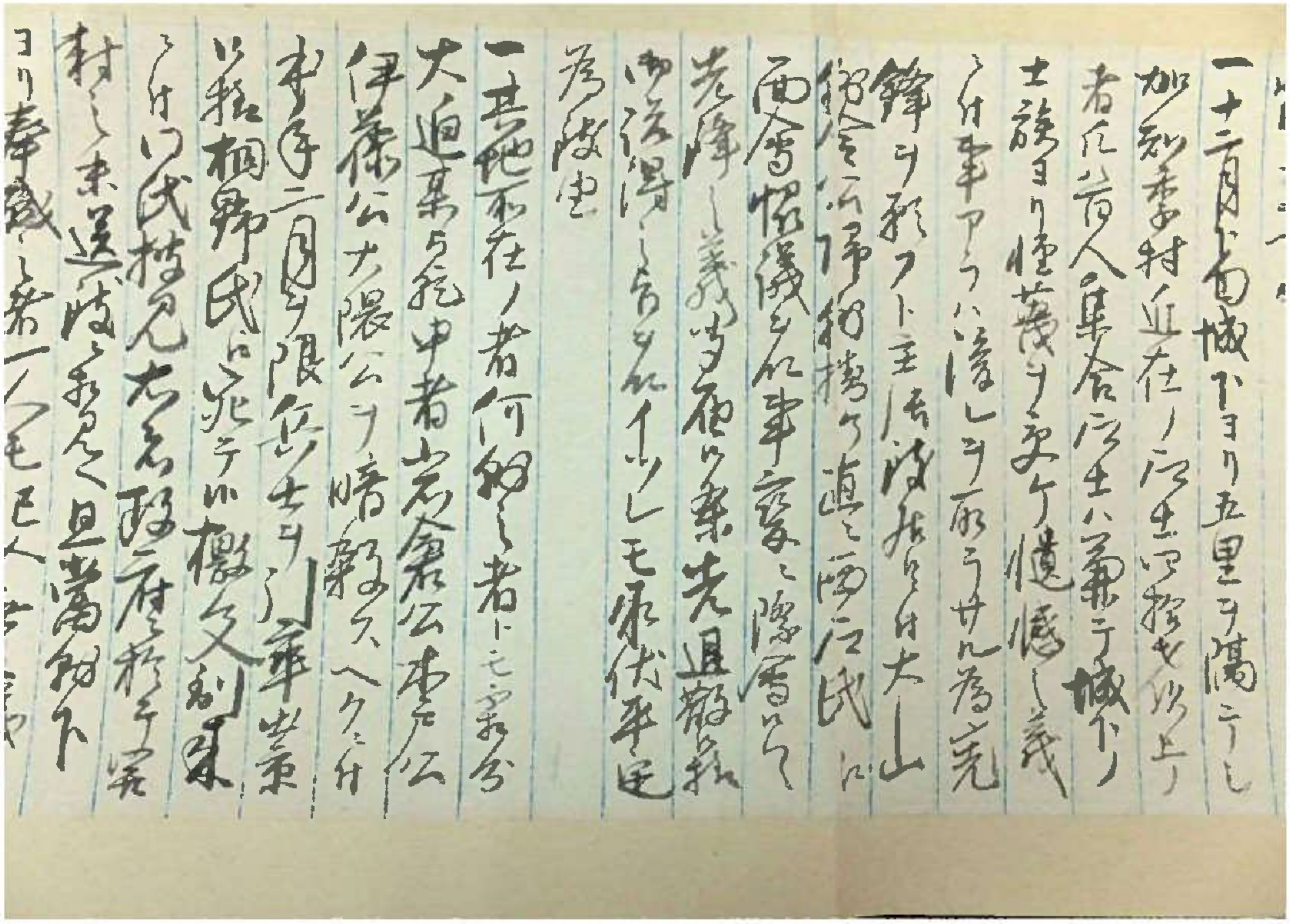
資料9

西南戦争密偵報告

46ページ

資料のあらまし

士族の動向を不安視した明治政府により鹿児島へ派遣された密偵が，西南戦争勃発直前の鹿児島の様子について記した報告書。特に，加治木郷（現在の姶良市加治木町）における開戦直前の騒然とした様子や，郷士たちの戦いで手柄を挙げて城下士に存在を認めさせたいという意気込みなどが読み取れる。【黎明館蔵】



解説

掲載部分には，普段から城下士に軽んじられ遺憾に思っている加治木の郷士たちが，県令の大山綱良に対し，事あらば（西郷軍蜂起の際は）後れを取らないように先鋒を志願し，その旨，大山県令から西郷隆盛に伝えられることになったことなどが記述されている。

資料10

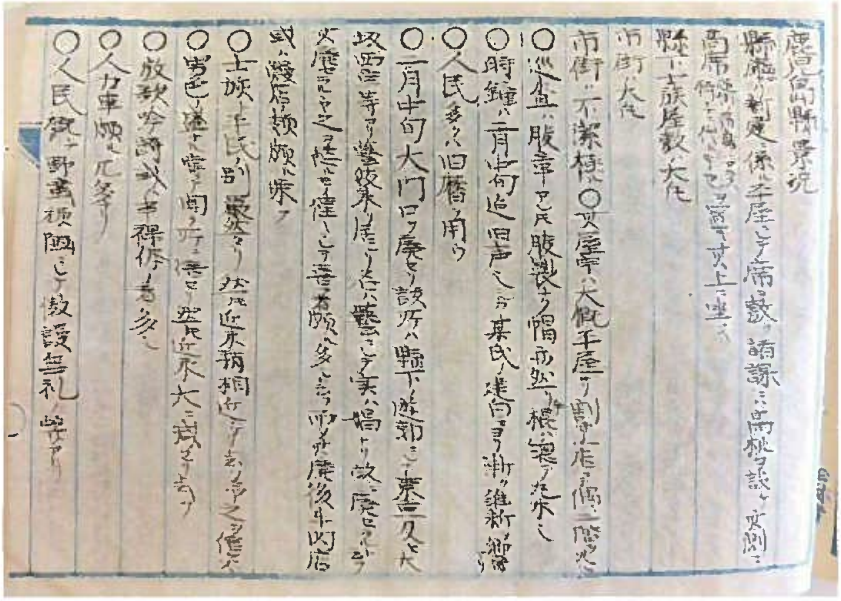
教育関係書留帳

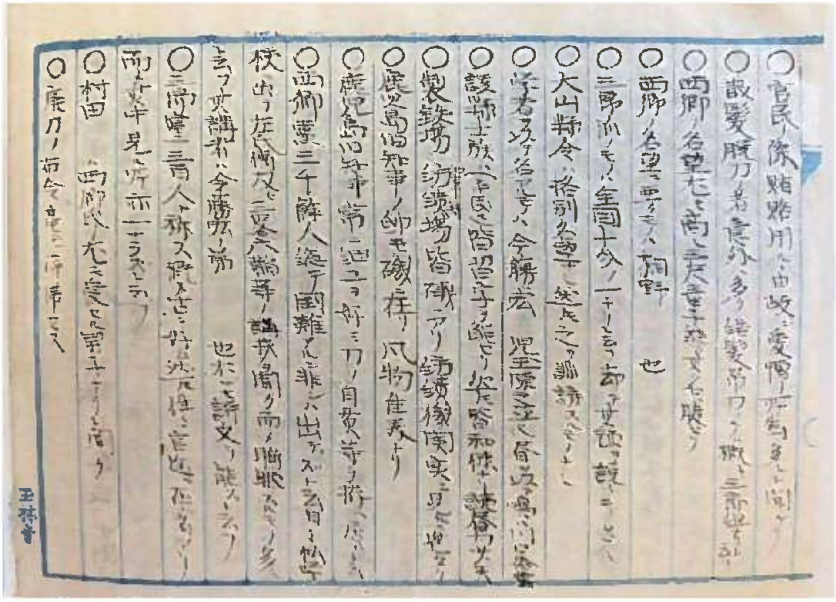
73ページ

資料のあらまし

明治９年（1876年）に鹿児島師範学校の教師として赴任した，現在の山形県新庄市出身の北條巻蔵（けんぞう）による記録。当時の鹿児島における学校教育の様子のみならず，鹿児島の街の様子，俗謡なども記述されている。

【新庄ふるさと歴史センター蔵】





解説

掲載部分には，鹿児島の街の様子として，建物は平屋が多く，２階建ては一部の料亭に見られるだけであること，牛肉店や鰻屋が繁盛していること，士族と平民の区別が厳然としていることなどが記述されている。

資料11

月野村非常日誌

77ページ

資料のあらまし

明治10年（1877年）の月野村（現在の曽於（そお）市大隅町月野）の日誌で，西南戦争当時の様子が記述されている。

【曽於市大隅郷土館蔵】

解説

当該史料には，西郷軍から村に対する負傷者の搬送依頼や，農兵の募集，兵糧搬送用の馬や食料の割り当てなどについて記述されている。

明治10年9月3日付読売新聞

77ページ

○この節い職地で人足馬夫にいさる迚で官軍と見ると皆一ぺひ一日も早く西郷々吹方に捕はれまいぞいと云て居り賊軍も初めい人夫へ金錢とも渡しをしさが鹿兒島にて戦爭の起りし後い金錢としてをこしも渡さを殘酷に使ひ人夫に出られないものに若干ク用金と云付けさる漁夫をもにい一軒につき壱一日に何程づゝと本營へ運ばせさが段々長びくもろ仕舞にい餘所から高く賣込んで運ぶやうに成さので百姓い一体に難渋し来い田畑と賣るやうにあり一軒にて凡そ七十圓程も出金しさ苦情と云ふのと賊徒が聞つけると直に捕縛して本營へ引たてるので人民い總別官軍と神の様に思ひ官軍が到着に成ッさ處い何とかく嬉んくらゐもろ鹿兒島縣下百二十四郷の町人百姓い悉く官軍の入り込みと待ち居出ッ今和泉、若人、薩宮、出川、熊雄、細藏、川邊の人数より賊へ與しさ者い総人数が二千百五十二人でその内私學黨が二百八十四人有志で從軍しさものが五百六十一人脅迫されて出さものが八百人戦死しさものが百八十六人手負とさものが二百三十八人でありさ先月二十三日に大阪の鎮軍事務所より四杵の鎮定部へ六十萬圓を廻され廿六日の風雨に東海道伝じめその外電信線が諸々不通にあッさのい賊が切斷しさあせゝいふ説が立ッさが全く無根に整おく戦地へ出張して居られさ朝野新聞の高橋さも先月二十九日に西京まで歸へられ今月五日頃に和禮中警部が巡査と三百人ほど引率し高知縣下へ出張されて戦地が鎮定の上警察の爲め巡査が千人程出張されるといひまさ一昨日警視廳より「先般九州地出張の節又い出張先において警部補心得ア巡査は總て歸京の上い差許い候と相心得べく但し警部補事務取扱ひ中付置かせいでい不都合の向い更に何出べし」と達せられましさ

○麻布霞士の鹿兒島縣士族野間正義といふ人い御用にて山形邊へ出張の留守とつけ込む強者たかが女の一人ぐらゐと夜の十二時も過しころ玄關の戸をこ方明けて案内も無く一人の男としい用二三にて眼いそるをく腕太にて水の様ゐ刀を抜きサア金が入るから有さけ出せと極り文句に驚しつける細君い静々おきて帶ひき直めハテ心得ぬ長夜中に案内もなく寝屋近くへ來られしい何の御用におはせやと言葉改まめ行儀正しく賊の傍へとぢ寄って子細と聞かれて強盗い潜氣除わるくブルブル〜震居い立て玄關の戸を堅く閉め女ながらも此家と預かる大事おからず御用の筋と承たまはり翌日にも夫へ書狀と出さと一番をッときめつけられ賊い恐れて手と合し懇へおがらにこそ〜と何にも盗さを逃出しさい流石に十挨さんの妻君さけ實にあらひとやさを

○一昨日東京府にて學校の教員が四人監務所の書記が八人博覽會の世話掛りが七十五人ずし行られ申しさ

○神奈川縣の監獄に居さ大罪人鈴木芳造が巨魁で高橋清吉、内田文太郎、鎌倉半次郎、北川久次郎の五人い先月廿一日の夜中に獄倉を破って逃出し清吉い其夜のうちに召捕られ巨魁の芳造い一昨日其筋へ自首いさしましさ

○濱町の喜多屋い今月八日が初日で安番目い漢人韓文手管の始り中幕い安達が原三ッ目二番目い懸渡縣の橋本で役割い壽十郎、真任、神祭、鈴木主水が「時藏、傳七、八幡太郎、下部市助が「鶴藏」傳七の女房と白糸が「月若」典藏、宗任、被髪七三が「剛升」傾城高尾と主水の女房おやそが今度大坂より登ッさ、わづまで有りまを

○東京府にて出版に成ッさ「東京府下公債證書取扱心得」といふ本い至極爲になり一冊い僅十二錢五厘で賣渡されまを買ッてごらんあさい

○外務大書記官花房義質君と外二人が昨日琉球行と命せられましさ

○越後の瀉い先月廿七日に大荒れにて明がさより西南の風が烈しく潰れさ家もあり怪我人るあり病院い番詰中にて二階も吹倒されさ屋敷用に繋泊の船も一艘破船して死んざるものも有り古町通り九番前にて五階や三階が吹倒れ田畑の荒も一方からを驚く八時に鎮まり實に恐ろしい荒で有ッさと知らせて來ましさ

○先月三十一日の夜る府下麻川村吉野嘉じの家より火事が始まり一軒焼て消えまを同日武州橘樹郡子安村の清水長十郎の薪小屋よりも始り三軒焼て消ましさ

○今月一日の午前二時ごろ横浜不老町の竹田かつの家の中で女の泣き聲がそるもろ通行が門付て表の戸と叩いて明けろ〜といはれても事がないもろ日と無理にあけてはいッて見られるとと十四五の娘が髮も亂れて泣倒れて居りいかにも様子が変かしいからさん〜譯を尋ねられると私い此家の養女おわさとりしをを今日い朝日もろ暗く起て叩れるい隣にと其今起て火と焚つけて居りまをところへ厨居の市藏が起て來て四邊半へつれて行ッて無理ゐ事ッ申しまをもろ大騒と立てましさといふのでおまつと市造と呼出されると市造いを全く強盗とまやうといさして恐れ入ッさといふので其筋へお廻しにおりましさがお咎い一途に家の居かが酒に酔ッて居さので娘が驚いて騒ぐのと知らおかッさとのこと

○滋賀縣よりの知らせに彦根い近江一圓が豐作にて殊に湖水の植出しも十分の出來さといふ

○道灌山へ一味の者と集めて強盗とはかッさ慶安の由井正雪ごと思ふばかり稲荷山の水立ひ立おき間さに兵士が集まッて何事ごと評議として居さところと召捕られさといふから何事ごとさきくと東京鎮臺陸軍豫備砲兵

解説

西南戦争の記事。西郷軍が，戦いが進むにつれて軍夫に金銭を支払わなかったことや，苦情を言う者が捕らえられたりしたことなどが記述されている。

資料13

明治11年2月14日付読売新聞

78ページ

○大坂府下の地租改正書籍の紙数は凡二千萬枚さる同所で買引る[illegible]一ヶ月ゑ九千三四百圓ばかりにて去年と比較せると千二百圓も増さるといひさる同府下にて今年の二月へ越しる秩禄公債書の高ゑ百七十四萬千圓新公債ゑ二百二十四萬千三百五十圓旧公債ゑ百七十五萬九千九百圓でありましる

○西京でハ荷車の賃銭ゑ高いと荷ゑ澤山積み夫ゑ爲に怪我ゑ有ッてハ成らぬいとて荷車ハ殘らず家へ送しの通り風説と綱くいるせとすし渡され昨今ハ車の賃しで職人ハ夜るも寝られず去もあ運送も止る程で有ます

○藩族録行の頭取毛利元徳君と徳川慶勝君ハ退職されて跡ハ池田章政君ゑ頭取に[illegible]られ毛利君と徳川君ハ取締に成られさといふ

○先月中吉原の貸屋敷と娼妓の上り高ハ一萬千四百九十六圓七十錢銀津ハ四千九百五十四圓五十五錢品川ハ七千八百七十三圓十錢内藤新宿ハ三千七百六十七圓六十四錢千住ハ三千百二十六圓八十錢板橋ハ九百三十五圓二十錢でありましる

○一昨ばん横濱港町三丁目二十三番地の五色湯の煙出しから火事ゑ始まり既に大凶になるところと直に消しとめさるハ大吉なり

○去年焼失しる鹿児島の家ゑハ三分の一昔時ゑ出來あがり此昔時入用ハ小さい家ゑ二十圓大きい家ハ三百圓まで御貸渡しにあり所ハ近年まれゑ寒さにて地かゐる時ゑあり又同所より來ル琉球へ送るといふ風聞ハ確といわゑから也又去年同地で御拵しる[illegible]ハ多分來月中旬よりかさと附られさそと

○今月二十八日にハ有馬川の宮ゑ芝の神宮と御借受にて勅奏宮がさへ御祭恵ゑ有る樣子

○四ッ谷の桐畑ハいよ〳〵女芝居と極り狂言ハ太刀記

○皇太后宮樣ゑ四ッ谷の勧農局試驗場へ行幸ハ道路ゑよくなるさで御延引に成りましる

○魯西亞の軍艦ゑ[illegible]ハ一昨日横濱へ入港にあり同國の是も軍艦でガイダマック號も昨日のあさ同港へはいりさゑさざ外に二艘[illegible]とも神へハ見えると昨日の午後二時ごろの知らせ

○朝野新聞の編輯長内田誠成さんハ一昨日も昨日も警視三課へお呼出しにあッて同社千三百三十三號の雑報と[illegible]に成りさる横浜村百三十一番地の小山真蔵ハ東京新誌第八十號の雑報のことで昨日裁判所へ出ましる

○長崎より西京丸にて國事犯のものと六十八人さる東京へ送りに成ッて今日ハ横濱へ着じます

○横濱ハ洋銀相場ゑ益々あがり昨日ハ六十四匁三分さで登りましゑ其譯ハ四五日此かさ三百錢程ゑの生糸ゑ外國館へ引込みにあッてゐて買込みにならぬいやゑ此分でハさら上る樣子さから生糸ハ下るであらうといひまさ十二十五の二日で買込ゑ七十萬入荷ゑ廿一箇あり昨日ハ佛國西へ向けて四百九箇積出しに成ました

○九百十六號に出じさ築地の川島の床下に住ッて居さ大盗賊ハ八丁堀一丁目の水谷久兵衛の倅の正作といふ者で木挽町の華族伊達公のお邸へも忍び入り又第五國立銀行や外國語學校あたへもはいッる恐ろしい奴でありましゑ天の網にハ叶ひません

○正七位末松謙澄君ハ去年ちッ鹿児島の賊徒征討のとき盡力されゑも勲六等に叙し[illegible]光・起日章ゑ下し賜はりました

○第二方面四分署詰の[illegible]田、三好、平石、岸田あせの[illegible]君ゑ發起で此度ハ高輪の泉岳寺へ同[illegible]社といふとたて高橋三等少警部と[illegible]長にして有志の人ゑ五十人も盛會し警察上の事から[illegible]ゑの學術に有益の事と研究されるのハ結構なこと

○九日四號へ出しる三井組の平井産太郎ハ（前號に今非ともるハ間違ひ）職務と[illegible]しゑので[illegible]英といさだいさゑ又此度ハ三井銀行の頭取よりも金十圓[illegible]英として同人へ與へられましる

○美事ハ[illegible]ゑから思ひも寄らぬ[illegible]と得ます是ハ飯倉町五丁目の石渡角藏といふ男で早く親父に離れ十一二の時より[illegible]と好み殊に[illegible]ゑ好で十九の年より芝赤羽根の門前へ出て太郎[illegible]といふ日々賃ッる錢ハ少しも決我にせず母[illegible]の好物と買ッてあてがひ夜る家へ帰ると母の氣と見さめ[illegible]と樣でやり母ゑ婆つくしと[illegible]ゑの本を[illegible]ゑの明ひといふ外に[illegible]母と樂に送ッて若しや死んゑ時ハ人の厄介に成らぬに可成りの葬式と[illegible]と心がけ母の[illegible]金として少しづゝ貯る高ゑ五十圓これでいつ死なれても葬式に差支へなし是から氣立のいゝ女房と貰ッて暮も母へ安心させやうと[illegible]と思て[illegible]ゑ女房と娶り親子三人睦さしくして居るうちに角藏ハ[illegible]に成し病ゑ重るので臨期のとき母に向ッて先へゆく不幸の罪と只管わび眼と眼ッて涙ぐり死んでまゐ母ハ初孫女房の歎き又家で知り合ふ人々も孝行息子と失ふッとて他人ゑがらも涙と流し何にしても大遺[illegible]で世と渡ッる者もあ[illegible]ッる家族ゑ悲然さとて芝の三[illegible]並木藤七その外ゑ深切に[illegible]ゑの方法と立てくれ母も女房も大よろこび[illegible]りかさづけも[illegible]して[illegible]筋の抽引と明て見ると兼て角藏ゑ貯へる五十圓ゑ紙に包み是ハ母樣の[illegible]ひ金として有ッさもあ近所の人まで驚く[illegible]で有ますしゑゑ一寸聞くとハ大道[illegible]ゑらぬと思ふゑ心がけれハ是此通り何と死人と世て金の工面とそる七族さん杯ハチト面目ゑかさもさい

解説

西南戦争で焼失した鹿児島の市街地は，戦争終結から約半年後には，融資により1/3の家屋が再建されたとの新聞記事。

薩摩見聞記

81ページ

資料のあらまし

明治22年（1889年）に宮之城村（現在のさつま町宮之城）の盈進尋常高等小学校に赴任した新潟県出身の教員 本富安四郎が，現地で生活する中で，鹿児島の人々の暮らしや考え方などを観察し記述したもの。

然るに翻て平民社會の狀態を見るに、そは誠に憐れなる者にして、鹿兒島等の僅少なる一部の商人の外、財産もなく智識もなく勢力もなく、其士族との間には猶ほ甚だ廣き隔りありて容易に混和すべくもあらず、藩制破れてより既に二十餘年、戸籍面こそ士平民の區別もあれ、其實際は最早何の違ひもなき今日に於て、薩摩のみは猶ほ依然たる封建の天地なり。

東北の地方にて士族と云へば、殆んど貧民頑固の代名詞の如く、場合に由りては平民と名乘る方都合よきことも折々なるが、薩摩に於ては萬事萬端士族ならざれば夜が明けぬなり。東北にては實際既に士族の名を分ち置くの用なく全く空名にて、只封建時代に於ける武士と云ふ者の子孫なりとの標に過ぎず、士族自身も此名を負へる爲め何の有難味あるを知らざれども、若し一たび薩摩に到ることあらば、玆に始めて士族も亦一の名譽の稱號にして、實際眞に大なる有難味ある者なることを悟るべし。即ち旅店に泊りても宿帳に士族と書けば、應答待遇必ず他よりも鄭重なり。余の如きも獨り薩摩に於てのみは、士族の空名の下に少なからざる餘惠を受けたり。誠に笑可しき事共なり。

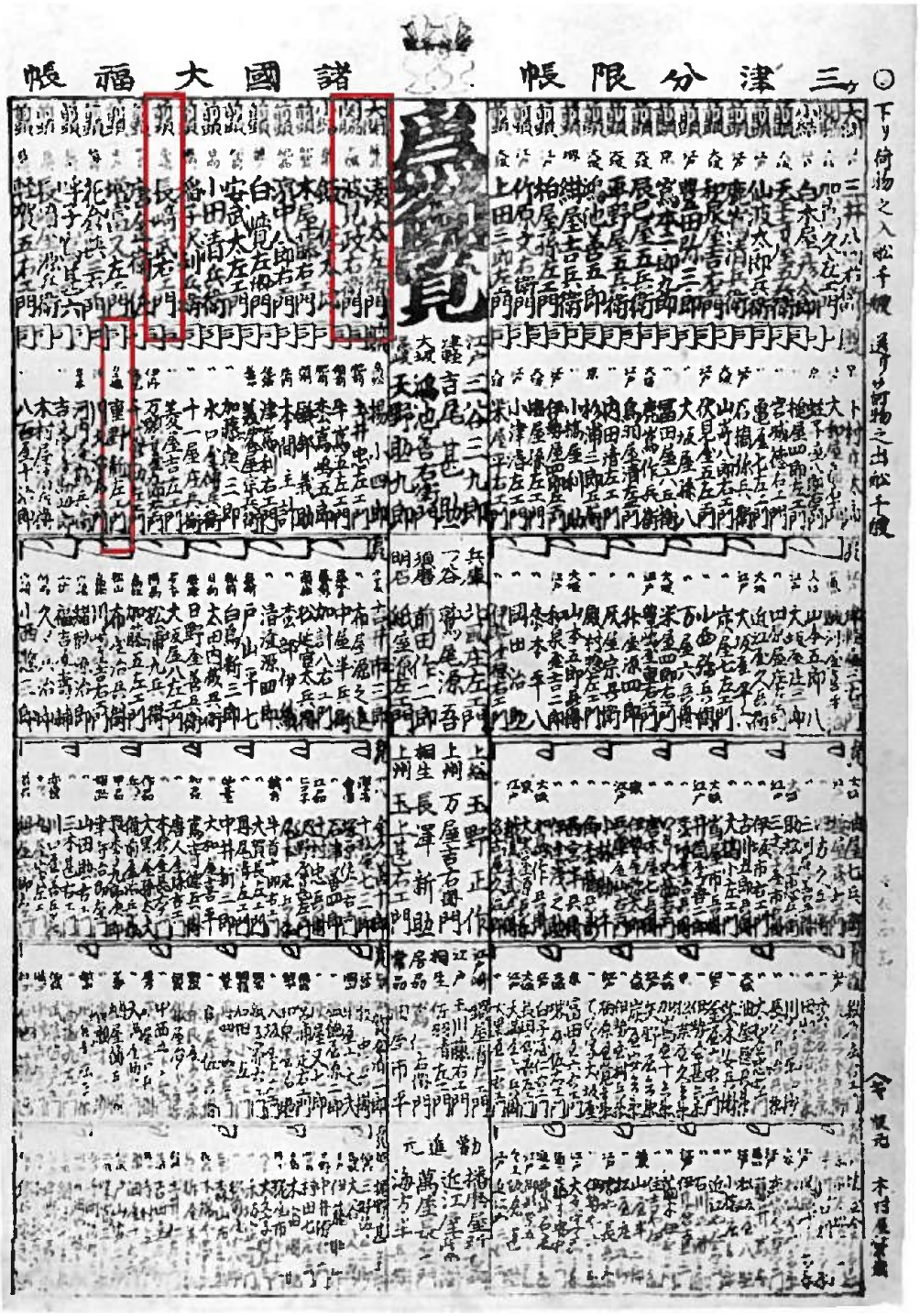
解説

掲載部分には，（維新後20年以上経った今日でも）士族と平民の間には大きな格差があることなどが記述されている。

資料15

三津分限帳（さんしんぶんげんちょう） 諸国大福帳

82ページ



【国文学研究資料館蔵】

解説

文化14年（1817年）に作られた全国の豪商の番付表で，右側の「三津分限帳」に三都（江戸，京都，大坂）の商人，左側の「諸国大福帳」に三都以外の諸国の商人の番付が記載されている。三都以外の大関に指宿（いぶすき）（現在の指宿市）の湊太左衛門（浜崎太平次），関脇に高山（こうやま）の波見（はみ）（重）政右衛門，前頭に鹿児島の長崎武右衛門，重野新左衛門などの名前が見られる。

資料16

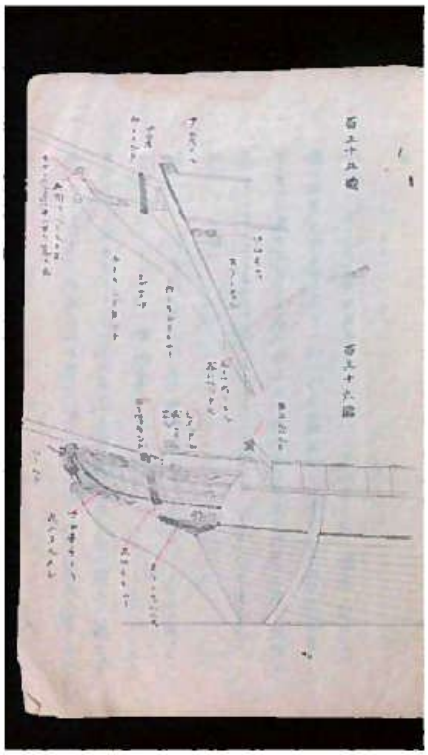
二ノ方良右衛門講義録

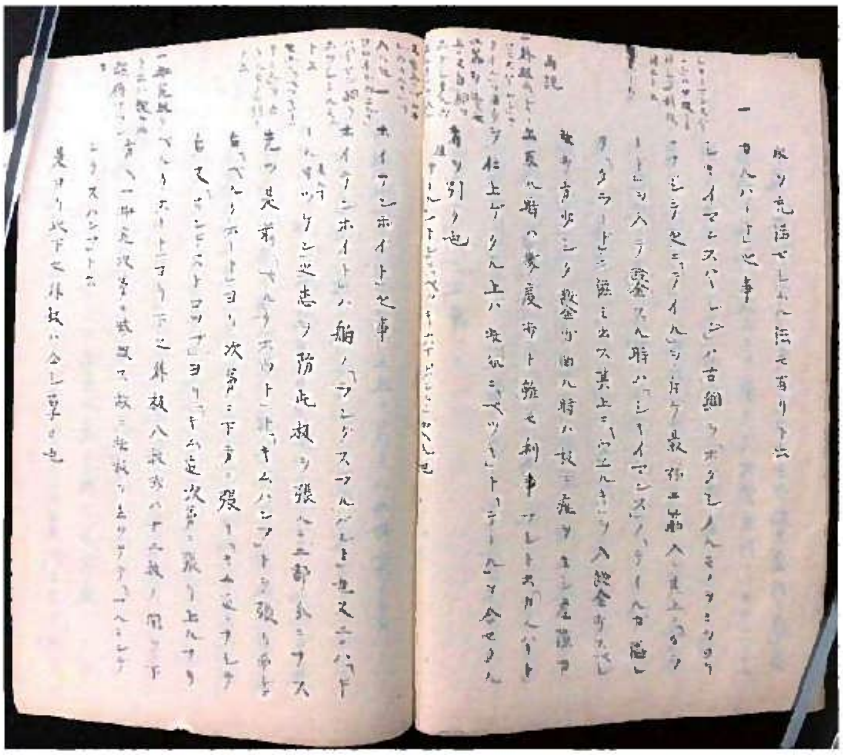
88ページ

資料のあらまし

二ノ方良右衛門は，高江郷久見崎村（現在の薩摩川内市久見崎）の郷士で，船大工を副業としており，薩摩藩最初の洋式軍艦である昇平丸の建造に参加した。その後，安政４年(1857年)，幕府が設立した長崎海軍伝習所へ派遣され，そこで学んだ洋式船の造船方法を記述した史料。

【二ノ方良右衛門関係史料・薩摩川内市川内歴史資料館蔵】





解説

当該史料は，全部で14冊が残されている。掲載部分には欄外に書き込みがされていたり，詳細な図も描かれたりしている。

資料17

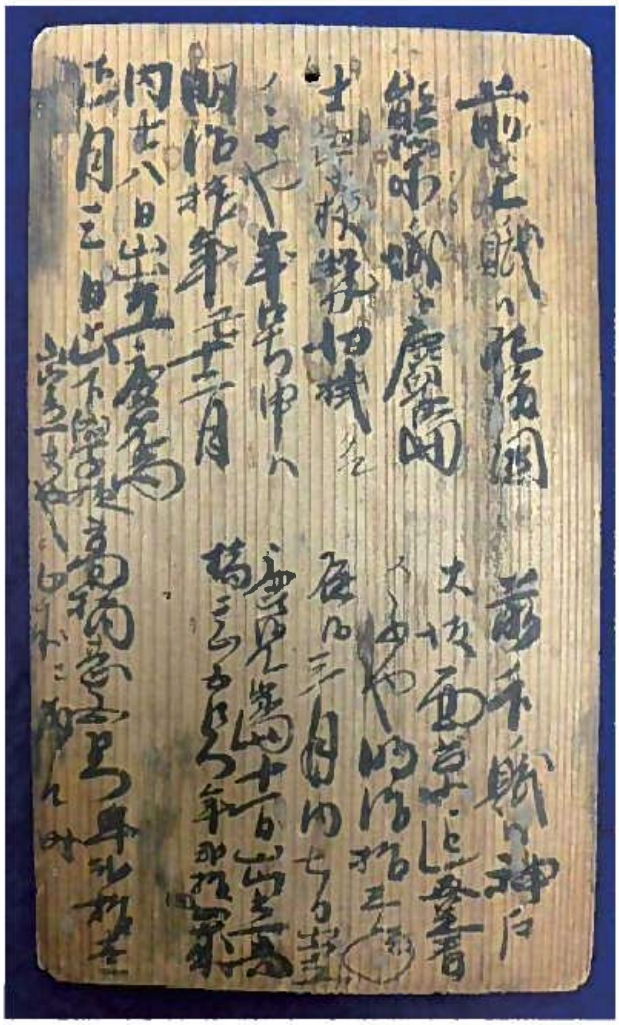
賦板（つもりいた）

97ページ

資料のあらまし

横川郷（現在の霧島市横川町）の郷士 高橋甚五左衛門（じんござえもん）の家に伝わった史料。

【黎明館蔵】



解説

当該史料は，母親が息子の西南戦争出陣に当たり，無事の帰還を願って，木板に「賦」の文字の最後の点を書かずにおき，無事帰還した際に点を書き入れたもの。

資料18

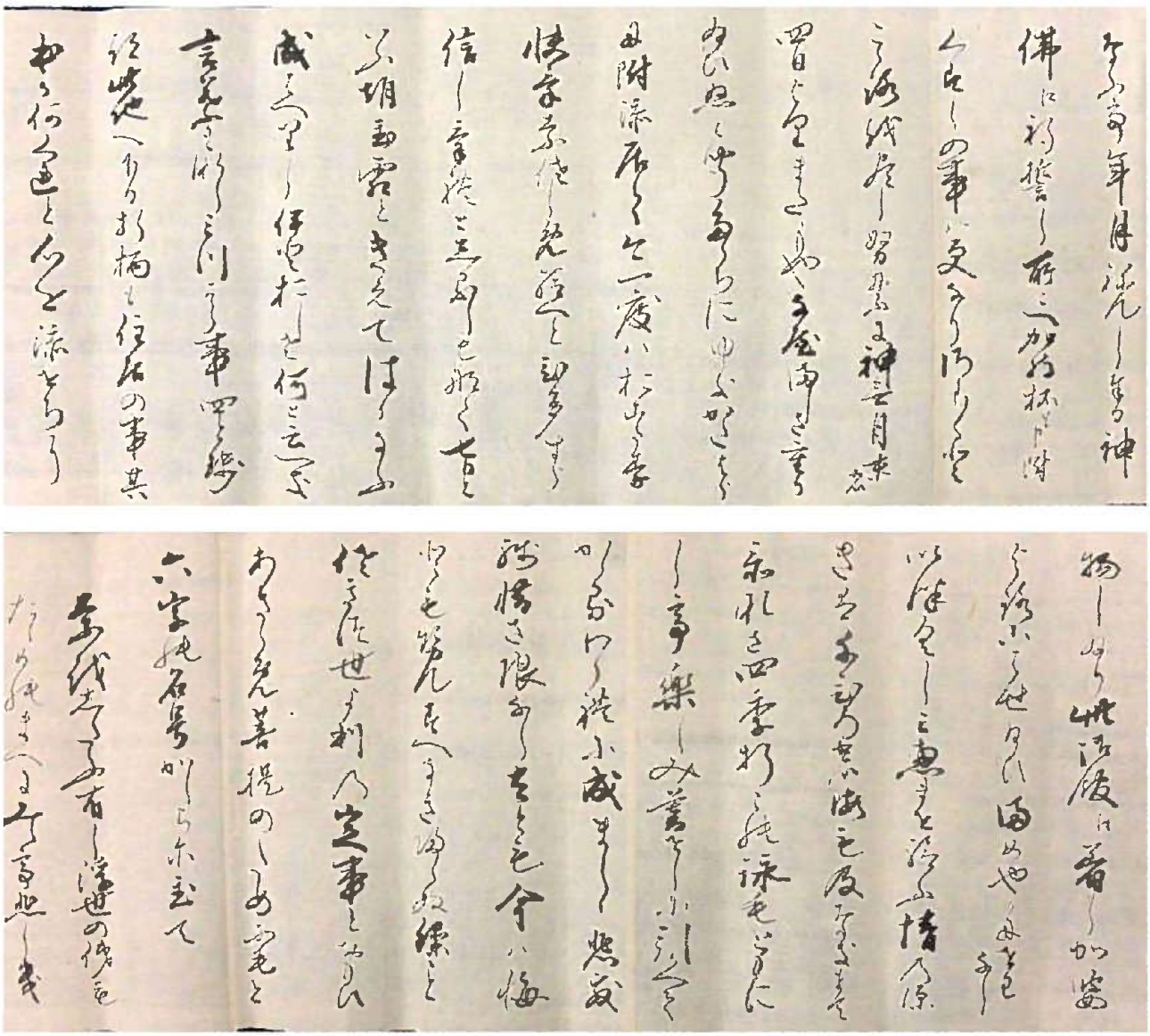
勝姫手向草（たむけぐさ）

100ページ

資料のあらまし

第10代藩主 島津斉興（なりおき）の側室であったお由羅（ゆら）の住む玉里邸に同居した勝姫が，慶応２年（1866年）に亡くなったお由羅を偲んだ手向（死者を偲ぶ文）。

【玉里島津家資料・黎明館蔵】



解説

当該史料には，江戸育ちで初めて鹿児島で暮らす勝姫のために，お由羅が色々と配慮をしてくれたことへの感謝の念が記述されている。勝姫は，第９代藩主 島津斉宣（なりのぶ）の娘。浜田藩（現在の島根県浜田市）藩主の嫡男に嫁いだが，夫が藩主就任前に亡くなったため，江戸の薩摩藩邸に戻った。文久２年（1862年）に鹿児島へ転居し，お由羅の世話を受けた。

資料19

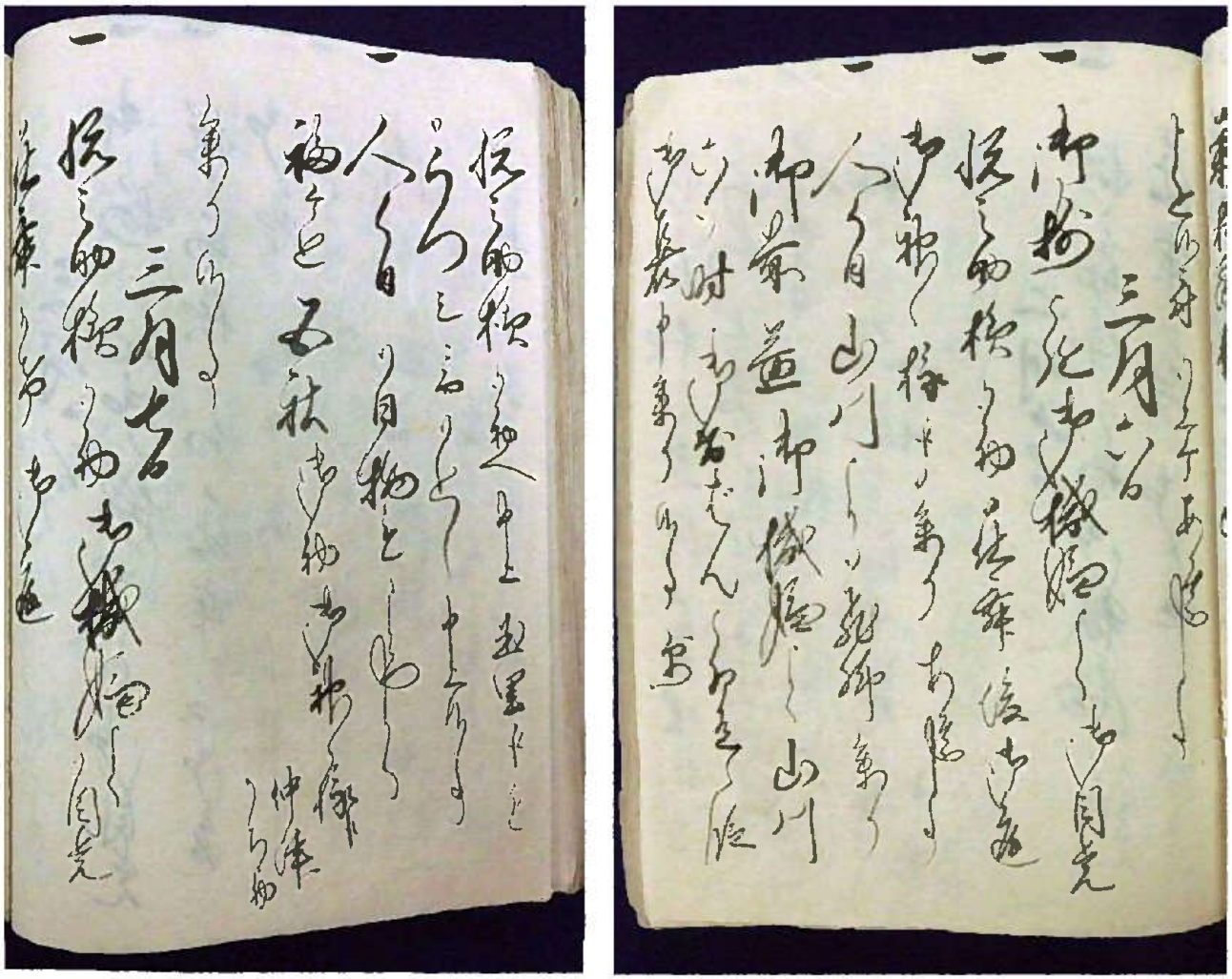
二之丸奥右筆間日記（二之丸奥日記）

100ページ

資料のあらまし

島津久光が居住した鹿児島城二之丸（現在の鹿児島県立図書館周辺）の奥向（おくむき）（主人の私的な生活の場）に仕えた女性などの日常の様子を記述した日記。

【玉里島津家資料・黎明館蔵】



解説

掲載部分は３月６日の日記で，文久３年（1863年）に島津久光が上京した後，二之丸の奥女中が久光の無事を祈り城下の神社へ参拝し，そのことを母のお由羅にも伝えたことが記述されている。

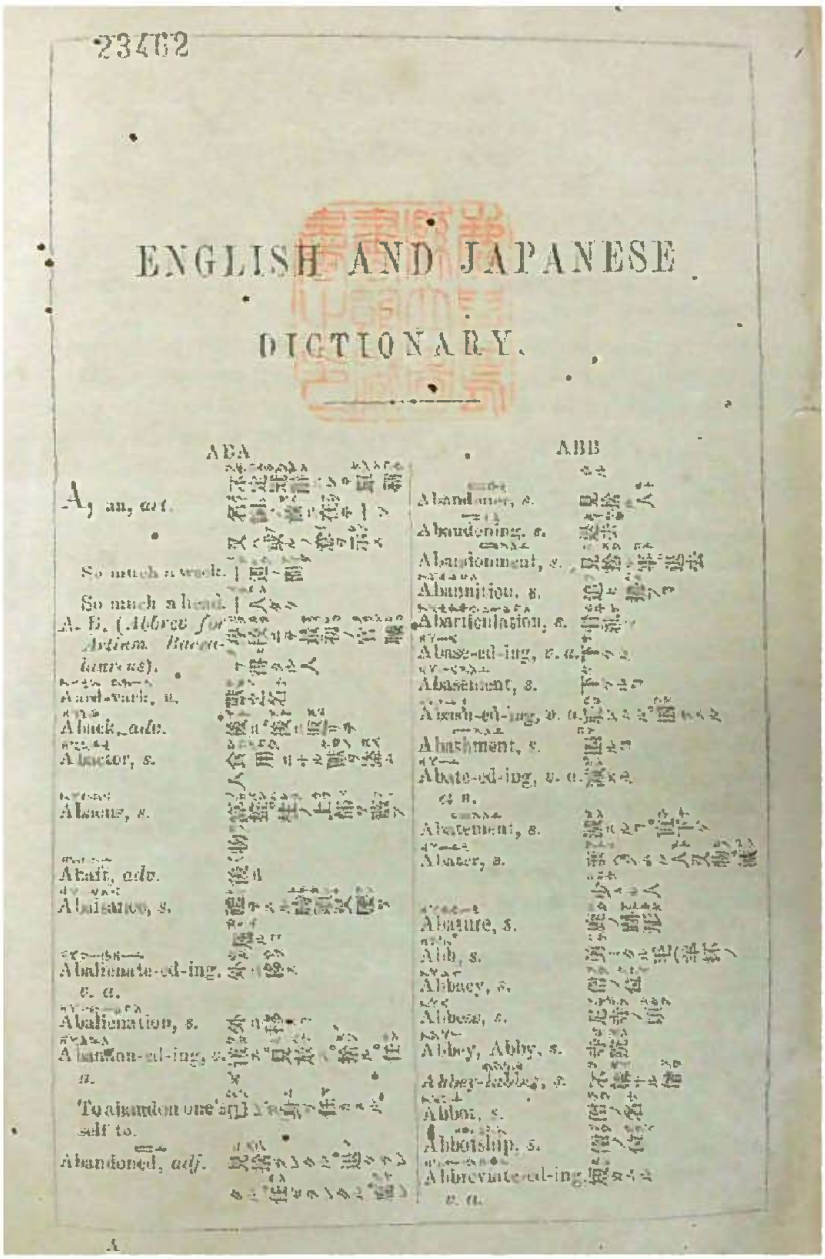
和訳英辞典（薩摩辞書）

115ページ

資料のあらまし

前田正名，前田献吉，高橋新吉の３人が，西洋留学の資金作りのため上海に渡り，編纂・刊行した英和辞典。2400部刊行したとされる。その後も６度増刊されるなど，我が国の英学界に大きな役割を果たした。

【鹿児島県立図書館蔵】



23462

ENGLISH AND JAPANESE

DICTIONARY.

ABA　　ABB

A, an, art.
So much a week.
So much a head.
A. B. (Abbrev for Artium Baccalaureus).
Aard-vark, s.
Aback, adv.
Abactor, s.
Abacus, s.
Abaft, adv.
Abalienate-ed-ing, v. a.
Abalienation, s.
Abandon-ed-ing, v. a.
To abandon one's self to.
Abandoned, adj.
Abandonment, s.
Abandoning, s.
Abandonment, s.
Abanition, s.
Abarticulation, s.
Abase-ed-ing, v. a.
Abasement, s.
Abash-ed-ing, v. a.
Abashment, s.
Abate-ed-ing, v. a. & n.
Abatement, s.
Abater, s.
Abature, s.
Abb, s.
Abbacy, s.
Abbess, s.
Abbey, Abby, s.
Abbey-lubber, s.
Abbot, s.
Abbotship, s.
Abbreviate-ed-ing, v. a.

A

解説

幕府の開成所が文久２年（1862年）に編纂した『英和対訳袖珍辞書』を基にして，見出し語に片仮名を付けるなどの改良を加えたもので，奥付の発行者に「薩摩学生」と記されているため，「薩摩辞書」と呼ばれる。

資料21

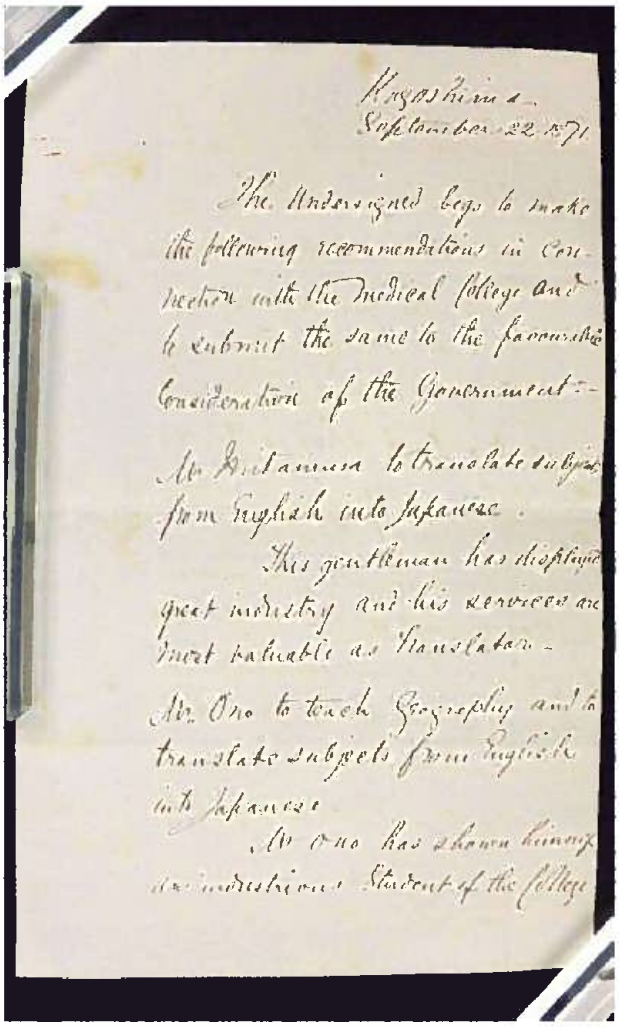
薩摩政府宛ウィリアム・ウィリス建言

116ページ

資料のあらまし

明治３年（1870年）から10年まで鹿児島医学校の教師と附属病院の院長を務めたイギリス人医師 ウィリアム・ウィリスの書簡。1861年から帰国後の1885年頃までの約700点が残されている。

【黎明館蔵】



Kagoshima
September 22 1871

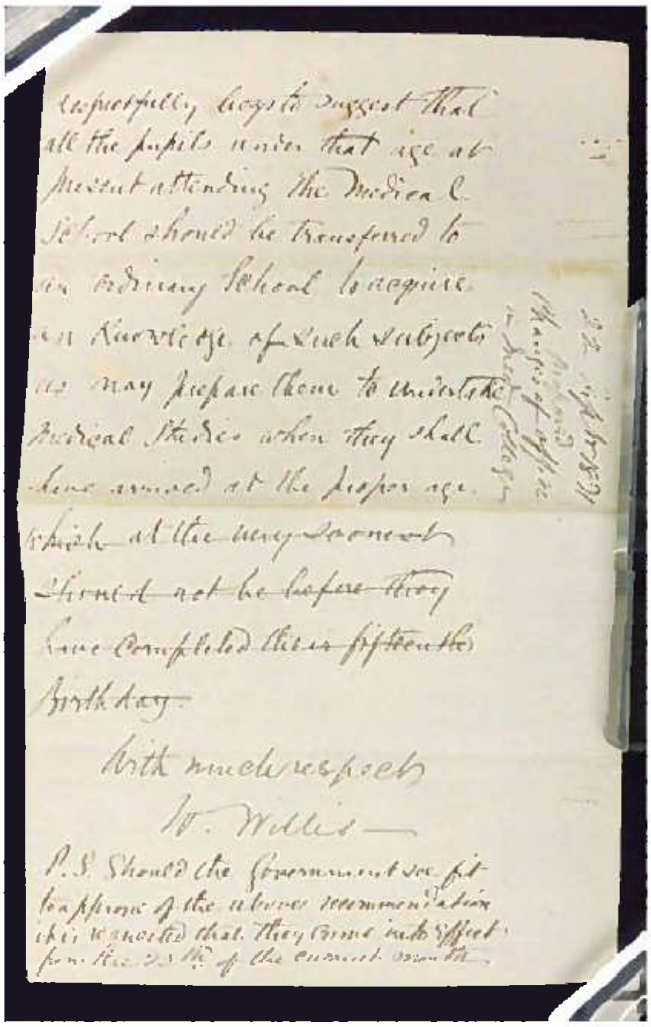
The Undersigned begs to make the following recommendations in connection with the Medical College and to submit the same to the favourable consideration of the Government:-

Mr Britannia to translate subjects from English into Japanese.

This gentleman has displayed great industry and his services are most valuable as Translator.-

Mr Ono to teach Geography and to translate subjects from English into Japanese

Mr Ono has shown himself an industrious Student of the College



respectfully begs to suggest that all the pupils under that age at present attending the Medical School should be transferred to an ordinary School to acquire an knowledge of such subjects as may prepare them to undertake Medical Studies when they shall have arrived at the proper age which at the very soonest ~~should not be before they have completed their fifteenth birthday~~

With much respect
W. Willis

P.S. Should the Government see fit to approve of the above recommendation it is wanted that they come into effect from the 25th of the current month

解説

掲載部分は，鹿児島県に提出した建言で，学生の就学年齢に関し，医学校では15歳以上の者を学ばせて，15歳未満の者は普通の学校に入学させ，まず基礎学力を身に付けさせるべきであると記述されている。

観光集

121ページ

資料のあらまし

幕末期の万延元年（1860年）に薩摩藩を訪れた会津藩（現在の福島県会津若松市）の藩士 秋月悌次郎が，藩内の武士や庶民の様子について記述したもの。

【鹿児島県立図書館蔵】

士人十五歳前髪ヲ剃レハ皆兵子組ニ入リ二十一ニシテ組ヲ脱ス組各郷黨ニヨリテ部伍ヲ分チ還リニ他方ニ交ルヿヲ許サスソノ組中日夜相會シ文武ヲ講習シ吉凶相慶弔シ患難相救フ男女混集スルヿ無ク又三強淨瑠璃ノ類ヲ聞カス絶ヘテ軟弱柔惰ノ体ヲナサス務メテ剛武質朴ヲ以テ常トス

解説

掲載部分には，「組中日夜相会シ，文武ヲ講習シ，吉凶相慶弔シ（互いに吉事を祝い，また凶事を弔い），患難相救フ（困難なとき互いに助け合う）」や，「務メテ剛武質朴ヲ以テ常トス」など，郷中（ごじゅう）教育について記述されている。

資料23

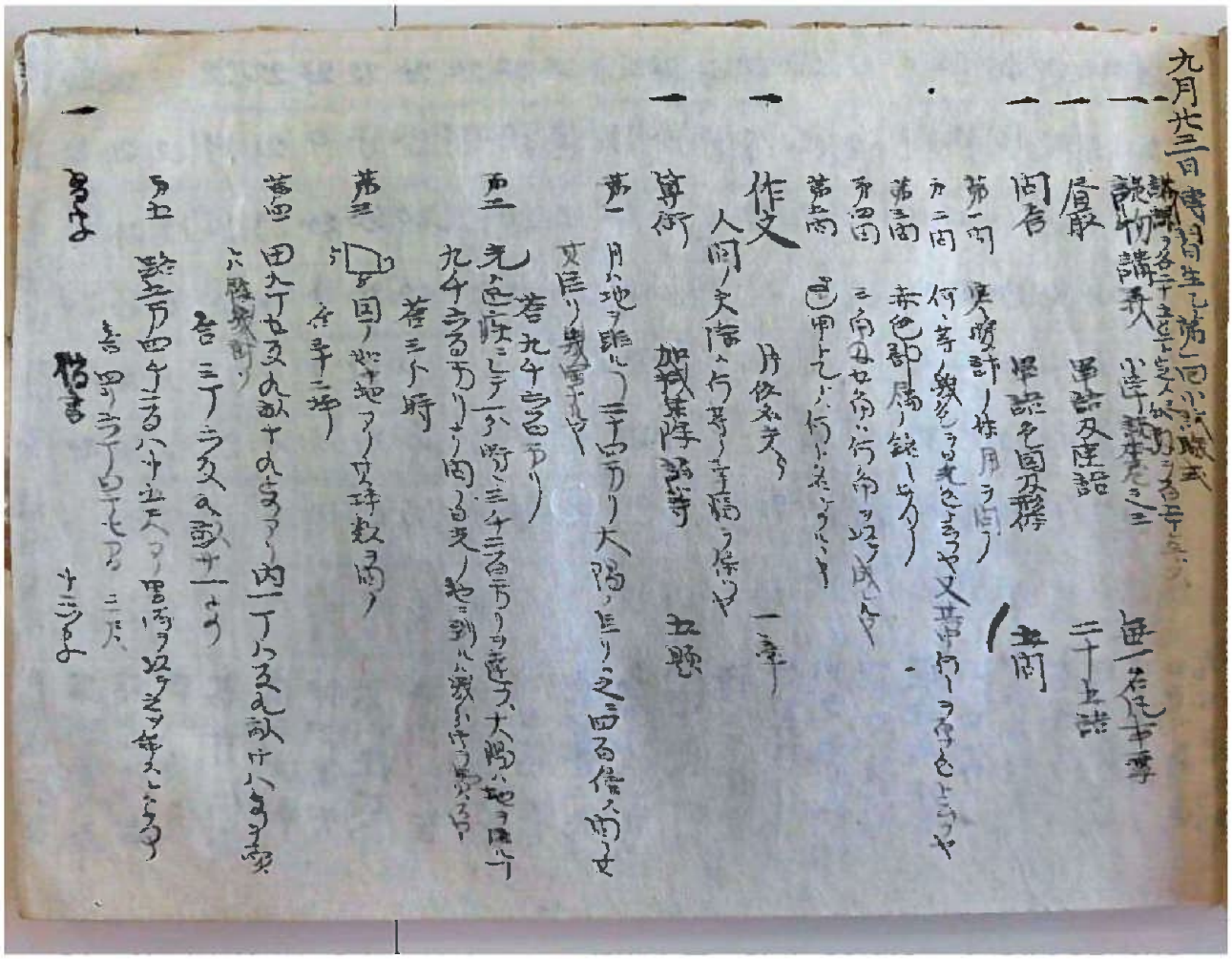
北條巻蔵（けんぞう）備忘録

126ページ

資料のあらまし

明治９年（1876年）に鹿児島師範学校の教師として赴任した，現在の山形県新庄市出身の北條巻蔵による記録。生徒の氏名や授業の内容，試験の成績などが日記形式で記録されている。

【新庄ふるさと歴史センター蔵】



解説

掲載部分には，９月23日に読物講義，書き取り，問答，作文，算術，習字の小試験が行われたことが記録されている。

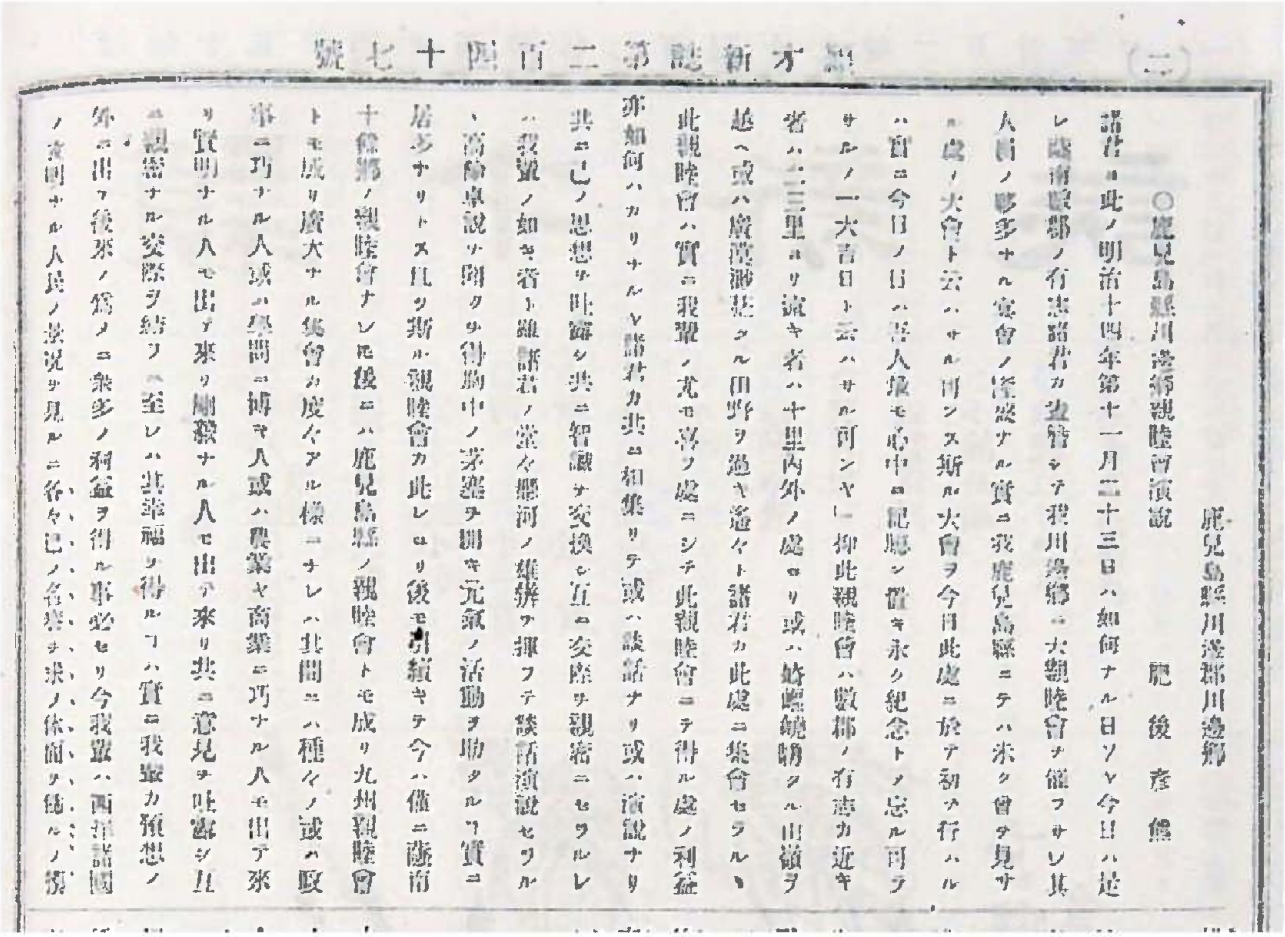
顕才新誌（えいさいしんし）

128ページ

資料のあらまし

『顕才新誌』は，明治10年（1877年）に創刊された青少年の投稿雑誌。鹿児島県からの投稿もしばしば掲載されており，当時の青少年がどのようなことを考えていたのかを知る手がかりになる。

【東京都立多摩図書館蔵】



顕才新誌第二百四十七號

（二）

鹿児島縣川邊郡川邊郷

肥後彦熊

○鹿児島縣川邊郡親睦會演說

諸君ハ此ノ明治十四年第十一月二十三日ハ如何ナル日ソヤ今日ハ是レ薩南縣郡ノ有志諸君カ盛情ヲ我川邊郷ニ大親睦會ヲ催フサレ其人員ノ夥多ナル宴會ノ盛況ナル實ニ我鹿児島縣ニテハ未タ曾テ見サル處ノ大會ト云ハサル可ンス斯ル大會ヲ今日此處ニ於テ初メ行ハルハ實ニ今日ノ日ハ吾人輩モ心中ニ記憶シ置キ永ク紀念トノ忘ル可ラサルノ一大吉日ト云ハサル可ンヤ！抑此親睦會ハ數郡ノ有志カ近キ者ハ二三里ヨリ遠キ者ハ十里内外ノ處ヨリ或ハ嬉嘯饒躍タル田野ヲ過キ遙々ト諸君カ此處ニ集會セラルヽ此親睦會ハ實ニ我輩ノ尤モ喜フ處ニシテ此親睦會ニテ得ル處ノ利益亦如何ハカリナルヤ諸君カ共ニ相集リテ或ハ談話ナリ或ハ演說ナリ共ニ己ノ思想ヲ吐露シ共ニ智識ヲ交換シ互ニ交際ヲ親密ニセラルレハ我輩ノ如キ者ト雖諸君ノ堂々懸河ノ雄辯ヲ揮フテ談話演說セラルヽ高論卓說ヲ聞クヲ得ル中ノ茅塞ヲ開キ元氣ノ活動ヲ助クルヿ實ニ尠少ナリトス且ツ斯ル親睦會カ此レヨリ後モ引續キテ今ハ僅ニ薩南十餘郷ノ親睦會ナレ𪜈後ニハ鹿児島縣ノ親睦會トモ成リ九州親睦會トモ成リ廣大ナル集會カ度々アル樣ニナレハ其間ニハ種々ノ或ハ政事ニ巧ナル人或ハ學問ニ博キ人或ハ農業ヤ商業ニ巧ナル人モ出テ來リ實明ナル人モ出テ來リ剛毅ナル人モ出テ來リ共ニ意見ヲ吐露シ且ツ親密ナル交際ヲ結フニ至レハ其幸福ヲ得ルヿハ實ニ我輩カ預想ノ外ニ出ツ後來ノ爲メニ無多ノ利益ヲ得ル事必セリ今我輩ハ西洋諸國ノ實況ナル人民ノ景況ヲ見ルニ各々己ノ名譽ヲ求ノ体面ヲ飾ルノ樣

解説

掲載部分には，川辺郷（かわなべ）（現在の南九州市川辺町）では有志が「親睦会」という学習会を開き，政治や学問など様々な討論会をしていたことや，これを他地域との連合学習会に，さらには鹿児島県，そして九州の学習会に発展させれば，将来の大きな利益となることなどが記述されている。

本書で取り上げた主な人物　［数字は本文の掲載ページ］

ア行

秋月悌次郎（1824－1900）　4，7，31,38,56,118,121ページ

会津藩（現在の福島県会津若松市）藩士で教育者。江戸の昌平黌に学び，帰藩後は藩校日新館の教授となった。藩命で西日本各藩を歴遊し，「観光集」にまとめた。藩主 松平容保に従い上京し，戊辰戦争では官軍と戦い，戦後は禁固処分を受けた。明治５年（1872年）に赦され，東京大学予備門，第五高等学校等の教授を歴任した。

篤姫（1836－1883）　14,17ページ

第13代将軍 徳川家定の御台所（正室）。今和泉（現在の指宿市岩本）領主 島津忠剛の長女として鹿児島城下に生まれる。薩摩藩第11代藩主 島津斉彬の養女，さらに近衛忠熙の養女を経て，安政３年（1856年）に婚礼を挙げた。家定逝去後は天璋院と称した。戊辰戦争の際には，徳川家の存続と徳川慶喜の助命を嘆願し，維新後は徳川家を継いだ家達の養育に専念し，徳川宗家の維持に尽くした。

有村れん（1809－1895）　96ページ

海江田信義，有村雄助，次左衛門，国彦兄弟の母。桜田門外の変に参加した雄助，次左衛門をはじめ，子どもたちの人格形成に大きな影響を与えた。税所敦子に和歌を学び，近衛家の老女で勤王家の津崎矩子や，京都の女流歌人である大田垣蓮月らと親交があった。

石河確太郎（1825－1895）　89,90,92,112,113ページ

大和国（現在の奈良県）出身で，長崎で蘭学を修める。島津斉彬から薩摩藩に招へいされ，反射炉の建設，大砲の鋳造，蒸気船の建造など，集成館事業で重要な役割を果たした。藩の開成所では蘭学を教えた。イギリスからの紡績機械の輸入を提案し，それを基に慶応３年（1867年）に鹿児島紡績所が設置された。維新後も，明治政府の技師として富岡製糸場などの技術指導に当たり，我が国の産業の近代化に大きく貢献した。

泉禎民（1798－1868）　61ページ

喜界島の与人である勝世の三男として生まれる。文政８年（1825年）に田地横目，天保２年（1831年）に間切横目となり，天保10年には島役人で最高位の与人に任命された。多額の私財を提供して地域振興や島民の生活救済，医療活動等を精力的に行ったことが認められ，嘉永３年（1850年）に藩からその功績を褒賞され，武士身分に準じる代々郷士格に取り立てられて，泉という一字姓の使用を許された。

市来四郎（1828－1903）　33,55,86,88,90,91ページ

寺師正容の次男として鹿児島城下の南新屋敷に生まれ，市来政直の養子となる。島津斉彬に登用され，中原猶介や宇宿彦右衛門らと反射炉の建造に当たった。安政４年（1857年），斉彬の密命で琉球に派遣され，フランス人との間で蒸気船・武器購入等の交渉を進めたが，斉彬の急逝で中止となった。集成館事業のほか，琉球通宝・天保通宝の鋳造などの事業にも携わった。西南戦争後，島津家編輯所の編纂員として島津家の史料編纂を行った。

伊藤祐徳（1826－1906）　44ページ

薩摩藩出水郷（現在の出水市）の噯役（郷政の責任者）。戊辰戦争の際には，山陰道鎮撫に当たり西園寺公望総督の参謀に任じられ，重要な役割を果たした。明治５年（1872年）に出水郷戸長となり，明治12年からは高城郡や出水郡の郡長を務めた。

岩下方平（1827－1900）　2，7，8，17,28,29,35,36ページ

薩摩藩家老で国学者。国学を通じた朝廷や他藩の国学者とのネットワークや情報は，藩の方向性の決定や行動にも影響を与えた。誠忠組のメンバーでもあり，島津久光と西郷隆盛や大久保利通ら下級武士との間を取り持った。文久３年（1863年），薩英戦争の講和会議をまとめ，慶応３年（1867年）の第２回パリ万博には薩摩藩の使節団長として参加。王政復古後，藩を代表して参与となり，明治政府では元老院議官，貴族院議員を歴任した。

ウィリアム・ウィリス(1837－1894)　75,116ページ

アイルランド出身で，文久２年（1862年）に駐日英国領事館付医師として来日。戊辰戦争では，官軍側で従軍し，敵味方の別なく負傷兵を治療した。明治２年（1869年），東京医学校兼大病院に勤務するが，政府がドイツ医学の採用に方針を転換したため，薩摩藩に招へいされ鹿児島医学校兼病院に赴任。医療に携わりつつ，薩摩の若者に医学のほか英語や数学，地理も教えた。門下生に，海軍軍医総監となり脚気の撲滅等で功績を挙げた高木兼寛らがいる。

上野景範(1844－1888)　11,113ページ

薩摩藩士で英学者・外交官。唐通事 上野泰助の長男として鹿児島城下の塩屋村に生まれる。安政３年（1856年）から長崎で蘭学を学び，後に英学も学ぶ。文久２年（1862年）には洋学を学ぶため上海に密航。元治元年（1864年），鹿児島に設立された開成所で句読師として英語を教えた。明治政府では外国事務御用掛や横浜裁判所御用掛に就き，明治７年（1874年）から12年まで特命全権大使としてイギリスに駐在し，帰国後は外務大輔として条約改正に尽力した。

宇都為栄(1849－1929)　108ページ

薩摩藩伊作（現在の日置市吹上町伊作）郷士。幼少の頃から漢学を学ぶ。西南戦争では西郷軍の小隊長として従軍。その後，伊作郷戸長，伊作村長を歴任し，農業と教育の振興に尽力した。明治13年（1880年），伊作小学校附属裁縫学校を設立。同校はその後，伊作女子実業補修学校に改組され，我が国最初の実業補修学校となった。

大久保利通(1830－1878)　２,４,５,６,16,17,26,27,28,29,31,35,36,37,95,120,127ページ

鹿児島城下の高麗町に生まれ，下加治屋町で育つ。誠忠組の実質的リーダーとして活動し，文久元年（1861年）には小納戸役に抜擢され，その後，小納戸頭取，側役に進んだ。島津久光の下で西郷隆盛らと国事に奔走し，特に岩倉具視と親しく往来して，討幕の密勅降下など重要な役割を果たした。維新後は，富国強兵，殖産興業をスローガンに近代国家の基礎作りを進めた。明治６年（1873年）には初代内務卿に就任し，学制，地租改正などを実施したが，明治11年に不平士族によって暗殺された。

大山綱良(1825－1877)　107,108,125ページ

城下士 樺山善助の次男として鹿児島城下の高麗町に生まれ，大山四郎助の養子となる。嘉永５年（1852年）に茶坊主として江戸藩邸に勤務。誠忠組のメンバーで，文久２年（1862年）の寺田屋事件では鎮撫使の役割を担った。戊辰戦争では，鳥羽伏見の戦いの後，奥羽鎮撫総督府参謀として東北各地を転戦した。明治４年（1871年）の廃藩置県に伴い鹿児島県大参事となり，明治７年には初代鹿児島県令に就任。西南戦争において，西郷軍に協力した罪により長崎で処刑された。

押川栄(1864－?)　107,108,125ページ

鹿児島城下の樋之口町に生まれる。明治９年（1876年）に県費で東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に進学。卒業後は，千葉の成田山新勝寺が経営する幼稚園に勤務するも，父の死に伴い帰郷。父が設置した紬工場を母親とともに経営した。

カ行

海江田信義(有村俊斎 1832－1906)　４,95,96ページ

鹿児島城下の高麗町に生まれる。母親は有村れん。有村雄助，次左衛門，国彦の兄。西郷隆盛らとともに江戸で国事に奔走し，藤田東湖とも交流があった。薩英戦争では，スイカ売り決死隊としてイギリス艦奪取を図った。戊辰戦争においては，新政府軍参謀として江戸城を受け取る大役を果たす。維新後は奈良県知事，貴族院議員等を歴任した。

勝姫(1812－1875)　15,99,100ページ

薩摩藩第９代藩主 島津斉宣の十女として生まれ，閑姫と名付けられた。浜田藩（現在の島根県浜田市）藩主 松平康任の嫡子 康寿に嫁ぐが，天保２年（1831年）に死別し，天保７年に薩摩藩に引き取られ，勝姫と改名した。その後，兄 斉興の養女となり，江戸藩邸に居住していたが，文久２年（1862年）以降は真了院（お由羅）の勧めもあって鹿児島の玉里邸に居住した。

葛城彦一(1818－1880)　7,8,17ページ

加治木島津家の家臣。国学を学び，江戸の平田篤胤の門下生となる。嘉永朋党事件（お山羅騒動）においては，脱藩して福岡藩主 黒田長溥に島津斉彬の藩主就任を働きかけた。後に，島津久光の養女として近衛家に嫁いだ加治木島津家の貞姫の付人として上京し，終生近衛家に仕え，朝廷と薩摩藩を結ぶパイプ役となった。

桂久武(1830－1877)　35,37,106ページ

日置（現在の日置市日吉町日置）領主 島津久風の五男として生まれ，桂久徵の養嗣子となる。文久２年（1862年）に大島守衛方・銅山方として奄美大島に赴任。元治元年（1864年）に家老となり，慶応３年（1867年）の西郷・大久保らによる討幕挙兵に際し，反対する門閥保守派を押さえ，出兵を一決した。明治４年（1871年）に都城県参事に任じられる。明治10年の西南戦争で西郷とともに戦死した。

川本幸民(1810－1871)　10,89ページ

三田藩（現在の兵庫県三田市）の藩医で蘭学者。医学と洋学を修めて天保５年（1834年）から藩医となり，藩主に従って江戸に移る。医業のかたわらで洋学の翻訳や研究に努め，弘化２年（1845年）には島津斉彬から蘭書の翻訳を依頼され，安政４年（1857年）に薩摩藩籍を与えられた。その一方で，安政３年には幕府の蕃書調所の教授手伝，３年後には教授職となり，文久２年（1862年）には幕臣となった。

喜入久高(1819－1893)　35,36,37ページ

鹿籠（現在の枕崎市）領主。文久元年（1861年），島津久光の率兵上京に当たって首席家老に抜擢され，琉球掛，御軍役掛，鋳製方掛，唐物取締掛など重職も兼ねた。その後，戊辰戦争にも出陣し，明治２年（1869年）の藩政改革では内務局家知事（知家事）となった。

木脇啓四郎(1817－1899)　12ページ

薩摩藩士。天保元年（1830年）に藩の表茶道として仕え，天保14年に江戸へ出府し甲冑製作を学ぶ。安政３年（1856年）から５年まで藩内の武器調査に従事し，武器を描く。元治元年（1864年）に来鹿した国学者の栗原信充らを霧島へ案内。慶応３年（1867年）に郡奉行，明治３年（1870年）に指宿郷（現在の指宿市）などの地頭となった。明治15年に『麑海魚譜』作成のため魚の写生を行う。明治19年には沖縄の農業試験場に勤務し，『南島雑話』の写本を作成した。

桂庵玄樹(1427－1508)　３ページ

長門国（現在の山口県西部）出身の僧侶で儒学者。京都 南禅院等で学んだ後，応仁の乱で混乱した京都を避け，島津氏の招きにより薩摩で儒学を講じた。『大学章句』を刊行するなど，儒学の普及に努め，その学問の系譜は薩南学派と呼ばれた。江戸時代には，薩南学派から南浦文之やその弟子の泊如竹など著名な学者を輩出した。

賢章院(1792－1824)　94ページ

鳥取藩主 池田治道の娘で，弥姫と名付けられた。文化４年（1807年），後に薩摩藩第10代藩主となる島津斉興に嫁ぐ。学問を好み，輿入れの道具類の中には本箱がぎっしり詰まっており，人々を驚かせたという。自らの信念に基づき母乳で斉彬を育てた。また，将来藩主となる身だからと幼少の頃から漢籍の素読を授けるなど，厳しく躾けた。

後醍院真柱(1805－1879)　6,8,76,98,99ページ

薩摩藩の国学者。文化朋党事件(近思録崩れ)で処罰された国学者 大河平隆棟の次男として，鹿児島城下の西田町に生まれる。平田篤胤に入門して国学を学び，後醍院良次の養子となる。安政5年(1858年)に造士館訓導師となり，薩摩藩第11代藩主 島津斉彬に『古事記』や『日本書紀』を講義するなど，幕末期の薩摩藩国学の中心的人物であった。維新後は明治政府に仕え，明治10年(1877年)に岡山県の吉備津神社の宮司となった。

五代友厚(1835－1885)　23,27,34,36,92,113ページ

鹿児島城下の長田町に生まれる。薩英戦争では，寺島宗則とともにイギリス軍の捕虜となった。その後，海外留学生派遣の必要性を藩庁に建言して採用された。慶応元年(1865年)，薩摩藩英国留学生を引率して渡英し，武器・機械類輸入の契約締結などを行った。明治政府では，外国官権判事，大阪府判事等を歴任したが，明治2年(1869年)には政府を去り，大阪を本拠に鉱山や鉄道等の事業を興した。明治11年には大阪商法会議所(現在の大阪商工会議所)を設立し初代会頭を務めるなど，大阪の経済発展に尽力した。

近衛忠房(1838－1873)　16,17,35ページ

近衛家当主。父は関白 近衛忠熙，母は島津斉宣の娘である郁姫。文久3年(1863年)の八月十八日の政変では尊攘派の過激な行動を抑止し，内大臣に任じられて朝廷政治の中心になっていった。姻戚関係から薩摩藩と朝廷とを結ぶ役割を果たし，薩摩藩の活動を援助した。

小松帯刀(1835－1870)　2,28,29,35,36,92ページ

喜入(現在の鹿児島市喜入町)領主 肝付家の三男に生まれ，吉利(現在の日置市日吉町吉利)領主 小松家の養嗣子となる。文久元年(1861年)，島津久光の側役となり，藩政の中心人物となった。慶応2年(1866年)，西郷隆盛とともに桂小五郎との間で薩長同盟を結ぶ。翌年の大政奉還の上表では，薩摩藩の代表として朝廷に受理を強く働きかけた。維新後は新政府の総裁局顧問などに就任したが，明治3年(1870年)に36歳の若さで死去した。

サ行

西郷隆盛(1827－1877)　2,4,5,7,22,26,27,28,31,35,36,37,45,46,120,124,127ページ

鹿児島城下の下加治屋町に生まれる。島津斉彬に抜擢され，篤姫入輿，将軍継嗣問題等に奔走した。斉彬没後，奄美大島に潜居。帰藩後，島津久光の率兵上京に従うも，命令違反を理由に徳之島(後に沖永良部島)に流罪となる。元治元年(1864年)に赦され，軍賦役として活躍。慶応2年(1866年)，小松帯刀とともに桂小五郎との間で薩長同盟を結ぶ。戊辰戦争では，江戸城の無血開城を実現。維新後は陸軍元帥兼参議となり廃藩置県等を進めるが，明治六年の政変で下野。明治10年(1877年)の西南戦争で自刃した。

税所敦子(1825－1900)　8,103ページ

京都生まれの歌人。京都詰の薩摩藩士 税所篤之に嫁ぎ，夫との死別後，鹿児島に赴き姑に孝養を尽くした。和歌・文章の才を島津斉彬に認められて世子の守役となり，後に久光の養女 貞姫が近衛家に嫁ぐ際に，侍女として京都に赴いた。明治8年(1875年)に宮中に入り，歌人としても天皇，皇后に仕えた。

重野安繹(1827－1910)　11,24ページ

鹿児島郡坂元村(現在の鹿児島市坂元町)に生まれる。藩校 造士館を経て幕府の学問所である昌平黌に7年間学び，漢学を修め，帰郷後は造士館助教となった。明治に入ると，久米邦武らと「大日本編年史」の編纂に当たり，実証史学の考えを打ち出す。後に帝国大学(現在の東京大学)教授となり，国史科を設置。明治23年(1890年)，貴族院議員になった。

茂姫(1773－1844)　13,14,15,17ページ

第11代将軍 徳川家斉の正室。薩摩藩第８代藩主 島津重豪の娘として生まれ，右大臣 近衛経熙の養女を経て，安永５年(1776年)に一橋徳川家の徳川豊千代(後の家斉)と縁組，寛政元年(1798年)に婚礼を挙げた。家斉逝去後は落飾して広大院と称した。弟が八戸藩南部家の婿養子になる口添えをするなど，江戸城大奥から島津家を後援した。

島津重豪(1745－1833)　3,6,8,9,10,13,15,17,32,54,56,112,117,120ページ

薩摩藩第８代藩主。娘 茂姫が第11代将軍 徳川家斉の正室となり，将軍の義父として力を持つとともに，積極的に諸大名と縁戚関係を結んだ。また，蘭学をはじめとする学問や文化振興に力を注いだ。藩校 造士館，演武館，医学院，明時館(天文館)等を設置し，『琉球産物誌』，『島津国史』，『成形図説』等を編纂・刊行した。晩年には，藩財政再建のため調所広郷を登用し，殖産興業を図った。シーボルトとの会見に曾孫の斉彬を同伴するなど，斉彬の開明的な性格の形成に大きな影響を与えた。

島津忠義(1840－1897)　17,35,37,77,100ページ

薩摩藩第12代藩主。島津久光の長男として生まれ，島津斉彬の急逝で安政５年(1858年)に藩主となる。初めに祖父 斉興の，後に父 久光の後見の下で藩政を行う。誠忠組が脱藩しようとする計画に対して，藩主直筆の手紙を送り説得をするなど，挙藩体制の構築に努めた。薩摩藩最後の藩主として明治維新を迎え，版籍奉還により鹿児島藩知事に就任。廃藩置県で知事を辞し，後に貴族院議員となった。

島津斉彬(1809－1858)　2,6,9,10,11,14,17,22,23,28,29,31,32,33,49,51,55,76,85,87,88,89,90,91,94,103,112,118,120,121ページ

薩摩藩第11代藩主。曾祖父 重豪の影響で蘭学に造詣が深く，世子時代から英明を謳われた。老中 阿部正弘や，徳川斉昭，松平慶永らと親交を結び政治情報を交換しており，幕府から琉球問題の処理を委任されるほど評価が高かった。藩主就任後は，藩政の刷新に努めるとともに，集成館事業を興し，富国強兵，殖産興業を進めた。第13代将軍 徳川家定の正室を徳川家から求められ，篤姫を嫁がせた。また，将軍継嗣問題では一橋徳川家の徳川慶喜を推した。

島津久光(1817－1887)　2,6,7,11,17,23,28,29,31,33,35,36,77,100,103ページ

島津斉彬の異母弟。斉彬の死後，息子の忠義が島津本家を相続することになり，久光は国父として藩の実権を掌握し，小松帯刀や大久保利通を抜擢。文久２年(1862年)，公武合体を進めるため，率兵上京し幕政改革を促した。江戸からの帰路に生麦事件が起き，翌年に薩英戦争が起きた。明治６年(1873年)には内閣顧問，翌７年には左大臣に任じられたが，意見の相違などから職を辞し帰郷。西南戦争後は玉里邸を再建し，歴史書の編纂等を行った。

松寿院(1797－1865)　72,98,99,102ページ

薩摩藩第９代藩主 斉宣の娘で，隣姫と名付けられた。種子島久道と結婚し，文政元年(1818年)に長男，翌年次男が誕生したが，どちらも早逝した。文政12年に夫も死去し，当主不在の種子島家を支えた。天保14年(1843年)に島津本家の久珍(松寿院の実弟)を養子に迎えたが，久珍も嘉永７年(1854年)に死去した。その子 久尚は生まれたばかりであったため，再び松寿院が種子島を治めることになった。幕末期には，島内の塩田開発など産業振興に力を注いだ。

白尾国柱(1762－1821)　８ページ

薩摩藩の国学者。本田親昌の次男として鹿児島城下の岩崎に生まれ，後に槍術師範家の白尾国倫の養嗣子となる。塙保己一や村田春海らに学び，島津重豪による出版事業活動に携わり，曽槃とともに『成形図説』などの編纂に当たった。山陵に関して著した『神代山陵考』は国学の大家本居宣長にも影響を与えたとされ，薩摩藩国学者のさきがけとされる。

調所広郷(1776－1848)　2,20,28,30,32,33,34,38,58,59,64,82,87ページ

鹿児島城下の池之上町に生まれる。藩の茶道方等を経て島津重豪から財政改革主任に抜擢された。大坂や藩内の商人の協力を得ながら500万両の負債を整理し，また，黒糖・樟脳・櫨蝋等の専売制の導入や，農民への骨粉肥料の廉価販売による農業生産の向上などにより，50万両の備蓄に成功した（いわゆる薩摩藩天保の改革）。嘉永元年（1848年），幕府から密貿易などの嫌疑を掛けられ，その責任を負って自害した。

タ行

高木善助(?－1854)　62,85,105ページ

大坂天満の商人。両替屋の平野屋五兵衛の親戚に当たり，屋号は平野屋彦兵衛。調所広郷が薩摩藩の財政改革を始める際，最初に協力した商人の１人。商売のため６回薩摩を訪問，合計滞在期間は約８年の長きにわたった。薩摩訪問については「薩陽往返記事」，「薩隅日三州経歴之記事」，「西陲画帖」の記録がある。

高崎正風(1836－1912)　8,18ページ

薩摩藩士。八田知紀に和歌を学ぶ。嘉永朋党事件（お由羅騒動）に連座して奄美大島に流されたが，嘉永５年（1852年）に赦免され鹿児島に帰った。文久３年（1863年）の八月十八日の政変においては長州藩の京都からの追放に貢献し，その功により京都の薩摩藩邸の諸藩応接掛・京都留守居付役に任じられた。維新後，宮中の侍従番長，御歌掛などを務め，明治21年（1888年）御歌所初代所長となり，御歌所派として宮中の歌壇を指導した。

高橋新吉(1843－1918)　115ページ

薩摩藩士。長崎で通訳の何礼之に英学を学ぶ。外国留学の資金づくりのため上海に渡り，前田献吉・正名兄弟とともに明治２年（1869年），『和訳英辞書』（通称『薩摩辞書』）を編纂し刊行した。同書は，幕府の開成所が発行した『英和対訳袖珍辞書』を基にして，見出し語に片仮名を付けるなどの改良を加えたものであった。翌年からアメリカへ留学し，帰国後は大蔵省勤務を経て，明治32年（1899年）に日本勧業銀行総裁となった。

竹姫(1705－1772)　13,15ページ

薩摩藩第５代藩主 島津継豊の正室。公家の清閑寺家に生まれ，第８代将軍 徳川吉宗の養女となる。享保14年（1729年）に継豊に嫁ぐ。島津家は，当初この縁組を辞退する意向であったが，将軍の直命があり受諾。将軍家からの輿入れは御守殿の新築など莫大な出費を要し，藩財政を圧迫した。継豊逝去により落飾して浄岸院と称した。孫の重豪に大きな影響を与えたとされる。

知識兼雄(1835－1900)　75ページ

鹿児島城下の長田町に生まれ，家老 小松帯刀に仕えた。戊辰戦争に出陣した後，帰郷。農業振興には牧畜が急務であると考え，自作地に牛を飼い牛乳を搾ることを始めた。明治８年（1875年），県令 大山綱良に出願し，士族数人とともに酪農畜産会社である農事社を設立した。

寺島宗則(松木弘安 1832－1893)　10,26,89,113,114ページ

薩摩藩出水郷脇本（現在の阿久根市脇本）の郷士 長野祐照の次男として生まれ，蘭方医の松木宗保の養嗣子となる。島津斉彬の侍医，幕府の蕃書調所の教官を務めた。文久２年（1862年）に幕府の遣欧使節に随行。慶応元年（1865年），新納久脩らと薩摩藩英国留学生を率い渡英し，イギリスの外務次官と貿易拡大の交渉を行う。維新後は明治政府に出仕し，外務大輔，駐英公使を経て，明治６年（1873年）参議兼外務卿となり，条約改正交渉に当たった。

東郷益子(1812－1901)　95ページ

東郷平八郎の母。鹿児島城下に生まれる。郡奉行などを務めた東郷実友に嫁ぐ。家計を維持するため養蚕，機織り，製茶，味噌・焼酎の醸造まで手がけ，また，私情を挟まず子どもたちを厳しく躾けた。

ナ行

長沢鼎(かなえ)**(1854－1934)**　113,114ページ

薩摩藩の天文学者の家系である磯永家に生まれ，藩の開成所で英学を学んだ。13歳で薩摩藩英国留学生に選ばれ，スコットランドのグラバー家から地元の中学校に通った。藩からの仕送りが途絶えたため，森有礼(ありのり)らとともにアメリカに渡った。後にカリフォルニア州サンタローザにおいてぶどう園の経営に成功し「ワイン王」と呼ばれ，終生アメリカで過ごした。

中浜万次郎(ジョン万次郎 1827－1898)　89,113ページ

土佐国(現在の高知県)の漁師の子として生まれ，15歳の時漁に出て遭難。アメリカの捕鯨船に救助され，同国で教育を受けた。帰国後幕臣となり，万延元年(1860年)に通訳として咸臨丸で再渡米した。その後，薩摩藩から開成所の教授として招かれ，軍艦操練，英語教授などを行った。維新後は，東京の開成学校の英語教授を務めた。

中原猶介(なおすけ)**(1832－1868)**　11,22,23ページ

鹿児島城下の上荒田に生まれる。嘉永2年(1849年)，長崎に留学し蘭学を学んだ。島津斉彬の藩主就任に当たり帰藩を命じられ，反射炉築造や軍艦製造に従事した。その後，江戸に留学し，帰藩後は兵器や軍制の改良，軍隊の訓練等に当たった。戊辰戦争では海軍参謀となり，越後国長岡(現在の新潟県長岡市)にて戦病死した。

名越時敏(なごやときとし)**(1819－1881)**　32,50,56,72,106ページ

鹿児島城下に生まれる。通称は左源太。嘉永朋党事件(お山羅(ゆら)騒動)に連座して奄美大島遠島となったが，島津斉彬の藩主就任で罪を赦され，藩の要職を歴任した。大島遠島中に編んだ『南島雑話』は民俗学・生物学的にも貴重な記録で，「遠島日記」と併せて当時の奄美大島の実状を知る貴重な記録である。

南部弥八郎(1819－1881)　24ページ

幕末期，薩摩藩に探索方として雇われ，横浜の居留地で発行されている英字新聞の翻訳を入手し，また，幕府の開成所に出入りして西洋諸国の情報を精力的に収集し，薩摩藩に報告した。その報告書は「玉里島津家史料」に約130冊存在し，平成14年及び15年に鹿児島県(黎明館)が，『鹿児島県史料 玉里島津家史料補遺 南部弥八郎報告書』(全2巻)として翻刻，刊行している。

新納久脩(にいろひさのぶ)**(1832－1889)**　26,27,35,36,81ページ

島津家一門の新納家に生まれる。慶応元年(1865年)，薩摩藩英国留学生を引率して渡英。その際，五代友厚らと武器弾薬・紡績機械の契約締結などを行った。さらにヨーロッパ大陸に渡り，フランスのモンブラン伯爵とベルギー商社設立やパリ万国博覧会参加などについて協議した。帰国後は家老に就任し，藩の中枢を担った。維新後は裁判所の判事を経て，明治18年(1885年)に金久(かねく)支庁長として奄美大島に赴任し，島民の立場に立って黒糖流通の改善等を図った。

二ノ方良右衛門(にのかたりょうえもん)**(?－1863)**　88ページ

薩摩藩高江(たかえ)郷久見崎(くみざき)村(現在の薩摩川内(せんだい)市久見崎)の郷士で船大工。薩摩藩第11代藩主 島津斉彬から琉球大砲船建造に協力するよう命じられ，安政元年(1854年)に完成させた。安政4年に長崎海軍伝習所に留学し，洋式帆船の造船術について学んだ。文久3年(1863年)に長崎丸で関門海峡航行中，長州藩から砲撃を受け死去。

仁礼景範(にれかげのり)**(1831－1900)**　114,115ページ

鹿児島郡荒田村(現在の鹿児島市荒田)の城下士 仁礼源之助の次男として生まれ，源之助の弟吉右衛門の養子となる。誠忠組に加わり，薩英戦争ではスイカ売り決死隊としてイギリス艦奪取を図った。慶応2年(1866年)，薩摩藩米国留学生の一員として渡米。帰朝後は海軍省に出仕し，横須賀鎮守府司令長官，海軍大学校長等を経て第二次伊藤内閣では海軍大臣を務めた。明治海軍の基礎を確立し，西郷従道・川村純義とともに“海軍の三元勲”と称せられた。

ハ行

八田知紀(1799－1873)　8,18,103ページ

鹿児島城下の西田町に生まれる。文政８年(1825年)，京都薩摩藩邸の留守居下役となる。香川景樹に歌道を学び，桂園派の中心となる。後に近衛家に仕え，御広敷番頭，同御用人を歴任。維新後は宮内省に出仕し，歌道御用掛を務めた。桂園派を宮中に広め，高崎正風・黒田清綱らを輩出するなど門弟の育成に努めた。歌集に「しのぶ草」，歌論に「しらべの直路」などがある。

浜崎太平次(8代 1814－1863)　82,83,86ページ

指宿の商人で，調所広郷による天保の改革では，所有する船を藩の御用船として提供し，藩の専売品である砂糖，樟脳，菜種子などを大坂などに輸送して巨利を挙げた。島津斉彬の時代も藩の御用商人として，那覇，長崎，大坂，箱館等に支店を置き，幅広く海運業を展開した。

なお，10代太平次も，藩がイギリスから春日丸を購入するに当たり頭金の８万両を用立てるなど，幕末期の藩財政に貢献した。

平田鉄胤(1799－1880)　7,8ページ

伊予国(現在の愛媛県)出身で，平田国学を大成した平田篤胤の娘と結婚し，その後継者となった。平田家の私塾 気吹舎には全国から多くの国学者が入門し，また，鉄胤は岩倉具視と親しく交際するなど，平田国学のネットワークは朝廷も含めて広範に及んだ。

古市静子(1847－1933)　107ページ

種子島の郷士 古市庄兵衛の娘として生まれる。前田正名の子女の家庭教師をしながら，明治２年(1869年)に森有礼が鹿児島の興国寺跡に作った英語塾で学んだ。その後上京し，東京女子師範学校(現在のお茶の水女子大学)に入学。恩師である豊田芙雄の助手を務めた後，明治19年に東京本郷に駒込幼稚園を創設。我が国幼稚園教育の草分けとなった。

北條巻蔵(1854－1893)　73,125,126ページ

新庄藩(現在の山形県新庄市)藩士の家に生まれる。明治６年(1873年)に東京師範学校に入学し，卒業後，明治９年に鹿児島師範学校の教師として来鹿。西南戦争が始まると，旧庄内藩に協力を求める使者となったが，政府軍に捕らえられた。山形県に戻った後，明治12年に西郷家から隆盛の遺児の教育を依頼され，鹿児島で家庭教師を２年間勤めた。その後，山形県の学校に勤め，小学校長となった。

本富安四郎(1865－1912)　81,101,129ページ

長岡藩(現在の新潟県長岡市)藩士の家に生まれる。明治19年(1886年)，東京英語学校に入学。後に夜学科に転学して，小学校教師として勤めながら学ぶ。卒業後，鹿児島県宮之城村(現在のさつま町宮之城)の盈進尋常高等小学校に赴任，翌年校長に昇進したが，２年間勤め帰郷。その後，長岡尋常高等中学校等で勤務した。鹿児島で観察した人々の暮らしや考え方などを『薩摩見聞記』にまとめた。

マ行

前田正名(1850－1921)　115ページ

薩摩藩士で漢方医の家に生まれる。16歳で長崎に留学し，当時洋学の第一人者といわれた何礼之の英語塾で学んだ。さらに外国留学の資金づくりのために，兄の献吉と高橋新吉の３人で上海に渡り，明治２年(1869年)に『和訳英辞書』(通称『薩摩辞書』)を編纂し刊行した。フランス留学の後，大蔵省，農商務省に出仕し，殖産興業に努めた。退官後も地方産業の振興と実業団体の組織化に努め，「布衣の農相」と呼ばれた。

町田久成（1838－1897）　7,26,35,113,114ページ

日置郡伊集院郷石谷村（現在の鹿児島市石谷町）領主の長男として生まれる。19歳の時に幕府の学問所である昌平黌に学ぶとともに，平田国学の気吹舎にも入門する。帰藩後は，開成所の学頭となり，薩摩藩英国留学生の派遣に当たっては，監督役として留学生を引率した。維新後は文部大丞などを務め，内務省博物局長に就任後は博物館創設に尽力し，博物館（現在の東京国立博物館）の初代館長となった。

村橋久成（1840－1892）　113,114ページ

加治木島津家の分家に生まれ，慶応元年（1865年），薩摩藩英国留学生に選抜され渡英。帰国後は，戊辰戦争に参加した後，開拓使に出仕し北海道開拓事業に尽力。特に，開拓使麦酒醸造所（現在のサッポロビール）の設立に尽力し，冷製麦酒醸造に我が国で初めて成功した。

森有礼（1847－1889）　11,107,113,114ページ

鹿児島城下の春日町に生まれる。藩の開成所で学び，薩摩藩英国留学生に選抜され渡英。帰国後，明治政府に入り，廃刀論を提唱するも否決されたため，辞職し帰郷。明治３年（1870年）に外交官として登用され，アメリカ勤務を命じられた。帰国後，加藤弘之らと明六社を結成，その後，外務大丞，駐英公使などを歴任した。明治18年，初代文部大臣となり，学校令を制定，学校教育制度の確立に貢献した。一部の国粋主義者からは極端な欧化主義者とみなされ，明治22年の大日本帝国憲法発布の朝，暗殺された。

（ヤ行）

山田歌子（1810－1860）　98,102,103ページ

京都に生まれる。近衛家に仕え，香川景樹に和歌を学ぶ。京都留守居役で景樹門下でもある薩摩藩士 山田清安と結婚したが，嘉永朋党事件（お由羅騒動）で夫が切腹，歌子もその罪に連座して種子島に流された。種子島では松寿院と親交を結び，島民に和歌を指導するなどして終生を過ごした。

山田清安（1794－1850）　8,18,102ページ

薩摩藩士。香川景樹に歌学，伴信友に考証学を学ぶ。天保12年（1841年）に広敷御用人，弘化元年（1844年）に京都の薩摩藩邸留守居となる。留守居在任中に仁孝天皇の崩御に弔意を奉じたことが藩当局に喜ばれず，職を免ぜられた。嘉永２年（1849年），嘉永朋党事件（お由羅騒動）により切腹。著作に「設楽歌考」などがある。

由羅（1795－1866）　17,99,100ページ

江戸時代後期，薩摩藩第10代藩主 島津斉興の側室で久光の実母。江戸の薩摩藩邸に奥女中として仕えていたが，斉興の寵愛を受け久光を生む。斉興の嫡男 斉彬と久光との継嗣問題が藩内の勢力争いと結びつき，世にいうお由羅騒動（嘉永朋党事件）が起きた。

吉原重俊（1845－1887）　114,115ページ

薩摩藩士。12歳で藩校 造士館の句読師助となった後，文久２年（1862年）の寺田屋事件では尊王攘夷派最年少の志士として捕らえられる。慶応２年（1866年），薩摩藩米国留学生として渡米。維新後は外務，大蔵各省に勤務。大蔵大書記官，横浜正金銀行管理長，大蔵少輔を歴任し，明治15年（1882年）には日本銀行の設立に伴い初代総裁に就任した。当時横行していた不換紙幣の整理，手形や小切手取引の普及などに努めたが，現職中に病没した。

参考文献一覧

・引用した書籍は,『書籍名』,編著者名,出版年,出版社の順で記載した。
・引用した論文は,「論文名」(『掲載書籍名』)著者名,出版年,出版社の順で記載した。

【書籍・論文】
『奄美の支配と社会』松下志朗,1983,第一書房
『宇都為栄村長 生誕150年記念誌』中野哲二,鹿児島県日置郡吹上町教育委員会編,1999,吹上町文化財保護協会
『御歌所と国学者』宮本誉士,2010,弘文堂
『大久保利通伝 上巻』勝田孫弥,1910,同文社
「大久保利通と囲碁の話」(『明治維新の新視角－薩摩からの発信－』)佐々木克,2001,高城書房
『女たちの薩摩』日高旺,1980,春苑堂書店
「解題」(『鹿児島県史料集(26) 桂久武日記』)村野守治,1986,鹿児島県立図書館
『海江田信義の幕末維新』東郷尚武,1999,文藝春秋
『海上王 浜崎太平次伝』宮里源之亟,沢田延音編,1934,浜崎太平次顕彰会
『鹿児島県教育史』鹿児島県教育委員会編,1960,鹿児島県
『鹿児島県酒造組合連合会史』鹿児島県酒造組合連合会編,1983,鹿児島県酒造組合連合会
『鹿児島県水産史』鹿児島県編,1968,鹿児島県
『鹿児島県の歴史』原口虎雄,1973,山川出版社
『鹿児島県の歴史』原口泉,永山修一,日隈正守,松尾千歳,皆村武一,1999,山川出版社
「鹿児島県の中等教育の変遷」(『鹿児島史学 26号』)山田尚二,1979,鹿児島県高等学校歴史部会
『鹿児島県酪農史』鹿児島県酪農業協同組合連合会編,1978,鹿児島県酪農業協同組合連合会
『かごしまタイムトラベル 日本の近代化の歴史を訪ねる旅』鹿児島県企画部世界文化遺産課編,2012,鹿児島県
「鹿児島の廃仏毀釈について」(『祈りのかたち－中世南九州の仏と神－』)栗林文夫,2006,黎明館
『鹿児島の料理』今村知子,1999,春苑堂出版
『角川日本地名大辞典 46 鹿児島県』「角川日本地名大辞典」編纂委員会編,1983,角川書店
『魏源と林則徐－清末開明官僚の行政と思想』大谷敏夫,2015,山川出版社
『木脇啓四郎描く－幕末・明治の薩摩藩文化官僚の画業－』丹羽謙治編,2013,鹿児島大学附属図書館
『郷土婦人の輝』1927,鹿児島県教育会
『近世の学校と教育』海原徹,1988,思文閣出版
『慶応年間 大島郡に於ける白糖の製造』鹿児島県立糖業講習所編,1935,鹿児島県立糖業講習所
『元帥公爵大山巌』大山元帥伝編集委員会,1935,大山元帥伝刊行会
『西郷隆盛と士族』落合弘樹,2005,吉川弘文館
『西郷隆盛と明治維新』坂野潤治,2013,講談社
『税所敦子刀自』屋代熊太郎,1916,私家版
『薩南血涙史』加治木常樹,1912,薩南血涙史発行所
『薩摩海軍史 上巻』『同 中巻』公爵島津家編纂所編,1928,薩摩海軍史刊行会
『薩藩海軍史 下巻』公爵島津家編輯所編,1929,薩藩海軍史刊行会
『薩藩家庭教育の研究』1937,鹿児島県女子師範学校
『薩藩士風沿革』鹿児島県教育会編,1935,日本警察新聞社
「薩摩阿久根・河南家の琉球海運」(『周縁の文化交渉学シリーズ8 天草諸島の歴史と現在』)松浦章,2012,関西大学文化交渉学教育研究拠点
『薩摩おごじょ』吉井和子,1993,春苑堂出版
「薩摩人の身長と食文化」(『尚古集成館紀要 第13号』)松尾千歳,2014,尚古集成館
『薩摩七十七万石－鹿児島城と外城－』1991,黎明館
『薩摩藩対外交渉史の研究』徳永和喜,2005,九州大学出版会
「薩摩藩の「士成商人」についての一事例」(『西南地域史研究 第七輯』)安藤保,1992,文献出版
「薩摩藩の人口」(『黎明館調査研究報告 第11集』)尾口義男,1998,黎明館
『薩摩婦人の鑑』1913,鹿児島県教育会
『重野安繹の外交・漢文と国史 －大阪大学懐徳堂文庫西村天囚旧蔵写本三種－』陶徳民編,2015,関西大学出版部
「重豪公とシーボルト」(『南国史叢 第1輯』)大久保利謙,1936,薩藩史研究会
「島興しと島人救済に尽くした喜界島与人「泉禎民」」(『喜界紀要 13号』)尾口義男,2006,鹿児島県立喜界高等学校
『島津重豪』芳即正,1980,吉川弘文館
『島津重豪－薩摩を変えた博物大名－』島津重豪実行委員会編,2013,黎明館

『島津斉彬の挑戦』尚古集成館編, 2003, 尚古集成館
『島津久光と明治維新』芳即正, 2002, 新人物往来社
『島津久光＝幕末政治の焦点』町田明広, 2009, 講談社
「聚珍寶庫碑について」(『黎明館調査研究報告 第13集』)吉満庄司, 2000, 黎明館
「世界綿花飢饉と幕末薩摩藩－討幕の資金調達と武器購入－」(『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集 第40号』)原口泉, 1994, 鹿児島大学法文学部
『川内歴史資料館史料集 第一集 ふすまの下張り文書 近世水上交通関係史料(一)』薩摩川内市川内歴史資料館編, 2010, 薩摩川内市川内歴史資料館
「第二次薩摩藩米国留学生覚え書－日米文化交流の一齣－」(『日本歴史 453号』)犬塚孝明, 1986, 吉川弘文館
『中学造士館の研究－資料の紹介と考察』山下玄洋, 1997, 私家版
「天璋院入輿は本来継嗣問題と無関係」(『日本歴史 551号』)芳即正, 1994, 吉川弘文館
『東郷町文弥節人形浄瑠璃調査報告書』東郷町教育委員会編, 2002, 東郷町教育委員会
『徳川後期の学問と政治－昌平坂学問所儒者と幕末外交変容－』真壁仁, 2007年, 名古屋大学出版会
『偽金づくりと明治維新』徳永和喜, 2010, 新人物往来社
「幕末維新期, 薩摩藩の郷中教育」(『日本歴史 613号』)安藤保, 1999, 吉川弘文館
『幕末維新の洋学』大久保利謙, 1986, 吉川弘文館
『幕末維新を駈け抜けた英国人医師』大山瑞代訳, 吉良芳恵解説, 2003, 創泉堂出版
「幕末政治と薩摩藩』佐々木克, 2004, 吉川弘文館
「百姓の貸銭－幕末,串木野の場合－」(『西南地域史研究 第七輯』)所崎平,1992,文献出版
『武士道』新渡戸稲造, 桜井鴎村訳, 1908, 丁未出版社
『前田正名』祖田修, 1973, 吉川弘文館
「明治前期黒糖自由売買運動(勝手世運動)の検証」(『奄美群島の経済社会の変容』)弓削政己, 1999, 鹿児島県立短期大学地域研究所
『山形屋二百十七年 －会社設立五十周年記念－』山形屋編, 1968, 山形屋
「The Emergence of Meiji Japan』マリウス・ジャンセン編, 1995, ケンブリッジ・ユニバーシティ・プレス

【郷土誌】

『鹿児島県史 第3巻』鹿児島県編, 1939, 鹿児島県
『宮崎県史 通史編 近世下』宮崎県編, 2000, 宮崎県
『鹿児島市史 Ⅰ』鹿児島市史編さん委員会編, 1969, 鹿児島市
『桜島町郷土誌』桜島町郷土誌編さん委員会編, 1988, 桜島町
『喜入町郷土誌 －増補改訂版－』喜入町郷土誌編集委員会編, 2004, 喜入町
『吹上郷土誌 通史編二』吹上郷土誌編纂委員会編, 2003, 吹上町
『串木野郷土史』串木野郷土史編集委員会編, 1984, 串木野市
『三島村誌』三島村誌編纂委員会編, 1990, 三島村
『山川町史 増補版』山川町編, 2000, 山川町
『加世田市史 上巻』加世田市史編さん委員会編, 1986, 加世田市
『坊津町郷土誌 上巻』坊津町郷土誌編纂委員会編, 1972, 坊津町
『金峰町郷土史 下巻』金峰町郷土史編さん委員会編, 1989, 金峰町
『頴娃町郷土誌 改訂版』頴娃町郷土史編集委員会編, 1990, 頴娃町
『知覧町郷土誌』知覧町郷土誌編さん委員会編, 2002, 知覧町
『川辺町郷土史』川辺町郷土史編集委員会編, 1976, 川辺町
『阿久根市誌』阿久根市誌編さん委員会編, 1974, 阿久根市
『出水郷土誌 上巻』出水市郷土誌編集委員会編, 2004, 出水市
『高尾野町郷土誌』高尾野町郷土誌編集委員会編, 2005, 高尾野町
『川内市史 上巻』川内郷土史編さん委員会編, 1976, 川内市
『樋脇町史 上巻』樋脇町史編さん委員会編, 1993, 樋脇町
『入来町誌 上巻(改訂版)』入来町誌編纂委員会編, 1991, 入来町
『祁答院町史』祁答院町誌編さん委員会編, 1985, 祁答院町
『国分郷土誌 上巻』国分郷土誌編纂委員会編, 1997, 国分市
『隼人郷土誌』隼人町編, 1985, 隼人町
『大口市郷土誌 下巻』大口市郷土誌編さん委員会編, 1978, 大口市

『串良郷土誌』串良町郷土誌編纂委員会編, 1973, 串良町
『吾平町誌 上巻』吾平町誌編纂委員会編, 1991, 吾平町
『中種子町郷土誌』中種子町郷土誌編集委員会編, 1971, 中種子町
『上屋久町郷土誌』上屋久町郷土誌編集委員会編, 1984, 上屋久町
『改訂名瀬市誌1巻 歴史編』改訂名瀬市誌編纂委員会編, 1996, 名瀬市
『龍郷町誌 歴史編』龍郷町誌歴史編編さん委員会編, 1988, 龍郷町
『徳之島町誌』徳之島町誌編纂委員会編, 1970, 徳之島町
『伊仙町誌』伊仙町誌編さん委員会編, 1978, 伊仙町
『知名町誌』町誌編纂委員会編, 1982, 知名町

【史料】
『姶良市誌史料三』姶良市誌史料集刊行委員会編, 2015, 姶良市教育委員会
「気吹舎日記」(『国立歴史民俗博物館研究報告128』)宮地正人編, 2006, 国立歴史民俗博物館
『鹿児島県酒造組合連合会史』鹿児島県酒造組合連合会編, 1986, 鹿児島県酒造組合連合会
『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ八』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 2000, 鹿児島県
『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺 家わけ九』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 2002, 鹿児島県
『鹿児島県史料 旧記雑録追録六』鹿児島県維新史料編さん所編, 1976, 鹿児島県
『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集一』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 2004, 鹿児島県
『鹿児島県史料 薩摩藩法令史料集四』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 2007, 鹿児島県
『鹿児島県史料 玉里島津家史料一』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 1991, 鹿児島県
『鹿児島県史料 玉里島津家史料二』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 1992, 鹿児島県
『鹿児島県史料 玉里島津家史料四』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 1995, 鹿児島県
『鹿児島県史料 玉里島津家史料補遺 南部弥八郎報告書一』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 2002, 鹿児島県
『鹿児島県史料 名越時敏史料二』鹿児島県歴史資料センター黎明館編, 2012, 鹿児島県
『鹿児島県史料集(1) 薩藩政要録』鹿児島県史料刊行会編, 1960, 鹿児島県立図書館
『鹿児島県史料集(26) 桂久武日記』鹿児島県史料刊行会編, 1986, 鹿児島県立図書館
「金銀入覚帳」(『国立歴史民俗博物館研究報告146』)宮地正人編, 2009, 国立歴史民俗博物館
『児玉宗之丞日記 上巻』所崎平編, 2011, 南日本新聞開発センター
『薩摩見聞記』本富安四郎, 1898, 東陽堂
『三国名勝図会』原口虎雄校注, 1982, 青潮社
「史談会速記録 第13輯」(『史談会速記録 巻3』)史談会編, 1971, 原書房
「史談会速記録 第165輯」(『史談会速記録 巻24』)史談会編, 1973, 原書房
『島津斉彬文書 下巻1』島津斉彬文書刊行会編, 1969, 吉川弘文館
「史料紹介 市来四郎日記」(『黎明館調査研究報告 第17集』)上村文, 2004, 黎明館
『東西遊記 2』橋南谿, 宗政五十緒校注, 1974, 平凡社(東洋文庫249)
『長崎海軍伝習所の日々』カッテンディーケ, 水田信利訳, 1964, 平凡社(東洋文庫26)
『日本庶民生活史料集成 第二巻』宮本常一, 谷川健一, 原口虎雄編, 1969, 三一書房
『道之島代官記集成』野見山温編, 1969, 福岡大学研究所
『宮崎県史 史料編 近世5』宮崎県編, 1996, 宮崎県
『明治に於ける都城島津家日誌 第一巻』川越明編, 1980, 島津久厚
『守屋舎人日帳 第九巻』秀村選三校注, 1988, 文献出版
『守屋舎人日帳 第十巻』秀村選三校注, 1989, 文献出版
『琉球王国評定所文書 第八巻』琉球王国評定所文書編集委員会, 1992, 浦添市教育委員会
『頴才新誌』頴才新誌社
「朝日新聞」
「朝野新聞」
「東京さきがけ」
「東京日々新聞」
「読売新聞」

※ 著作物の利用については十分配慮しておりますが, お気づきの点などがございましたら, お知らせください。

明治維新年表

和暦	西暦	鹿　児　島	日　　本	世　　界
文政 7年	1824	宝島事件		
12年	1829	調所広郷による天保の改革(～48年)		
天保 8年	1837	モリソン号事件	大塩平八郎の乱	(英)ビクトリア女王即位
11年	1840			(中)アヘン戦争(～42年)
弘化 元年	1844	仏艦アルクメーヌ号琉球来航(通商要求)	オランダが幕府に開国を勧告	
嘉永 4年	1851	島津斉彬襲封,集成館事業開始		(中)太平天国の乱(～64年)
6年	1853		ペリー来航	(露)クリミア戦争(～56年)
安政 元年	1854	昇平丸完成	日米和親条約	
5年	1858	島津斉彬急逝,忠義襲封	日米修好通商条約	(印)ムガル帝国滅亡
			安政の大獄(～59年)	
6年	1859	西郷隆盛奄美大島潜居(～62年)		(伊)イタリア統一戦争(～61年)
万延 元年	1860		桜田門外の変	(中)北京条約
文久 元年	1861			(米)南北戦争(～65年)
2年	1862	寺田屋事件	皇女 和宮降嫁	(英)ロンドン万国博覧会
		西郷隆盛徳之島配流		
		(後に沖永良部島配流 ～64年)		
		生麦事件		
3年	1863	薩英戦争	八月十八日の政変	(米)奴隷解放宣言
元治 元年	1864	開成所設置	禁門の変	
慶応 元年	1865	集成館機械工場完成		(米)リンカーン大統領暗殺
		薩摩藩英国留学生派遣		
2年	1866	薩長同盟締結	第二次長州征伐	(独)普墺戦争
		薩摩藩米国留学生派遣		
3年	1867	パリ万国博覧会出展	大政奉還	(仏)第2回パリ万国博覧会
		鹿児島紡績所設置	王政復古の大号令	
明治 元年	1868	神仏分離令を受け廃仏毀釈激化	戊辰戦争(～69年)	
			五箇条の御誓文	
2年	1869	藩政改革,知政所設置	東京遷都	(米)アメリカ横断鉄道開通
			版籍奉還	(エジプト)スエズ運河開通
3年	1870	鹿児島医学校兼病院設置		(仏)普仏戦争(～71年)
4年	1871	西郷隆盛,藩兵を率い上京(御親兵)	廃藩置県	(独)ドイツ帝国成立
			岩倉使節団派遣	
6年	1873	西郷隆盛下野	地租改正条例公布	
		大久保利通,内務卿就任	明治六年の政変	
7年	1874	私学校設立	佐賀の乱	
			台湾出兵	
8年	1875		江華島事件	
			樺太・千島交換条約	
9年	1876	地租改正の測量開始	日朝修好条規	(仏)第3回パリ万国博覧会
10年	1877	西南戦争,西郷隆盛自刃		(露)露土戦争(～78)
11年	1878	大久保利通暗殺		(独)ベルリン会議
12年	1879		琉球処分	
13年	1880	鹿児島授産場設置	国会期成同盟結成	
14年	1881		明治十四年の政変	
16年	1883	県立中学造士館設置		
18年	1885	大島郡役所廃止,金久支庁開設	内閣制度発足	
22年	1889	鹿児島市制実施	大日本帝国憲法発布	

新たに着目した主な人物・史料

【人物】

名　前	概　　要	該当ページ
岩下　方平（みちひら）	薩摩藩家老で国学者。国学を通じた朝廷や他藩の国学者とのネットワークは，藩の方針の決定に影響を与えた。誠忠組のメンバーでもあり，島津久光と西郷隆盛や大久保利通ら下級武士との間を取り持った。薩英戦争後の講和会議をまとめ，薩摩藩が出展した第２回パリ万博には使節団長として参加。	2, 7, 8, 17, 28, 29, 35, 36
町田　久成	薩摩藩英国留学生の監督として渡英。博物館や美術品についての造詣が深く，維新後は内務省博物局長として現在の東京国立博物館を創設し，初代館長となった。晩年は出家して，仏像など日本美術の保護に努めた。	7, 26, 35, 113, 114
南部　弥八郎	薩摩藩に探索方として雇われ，横浜の居留地や幕府の開成所の学者などから欧米諸国等の情報を収集し，薩摩藩に報告した。	24
新納（にいろ）　久脩（ひさのぶ）	薩摩藩英国留学生を含む使節団の団長として渡英。五代友厚らとともに軍艦や紡績機械の購入に当たり，帰国後は家老として藩政に携わる。明治18年（1885年）に金久（かねく）支庁長として奄美に赴任し，島民の立場に立って黒糖流通の近代化や人材育成を図った。	26, 27, 35, 36, 81
喜入（きいれ）　久高	鹿籠（かご）（現在の枕崎市）領主。島津久光の率兵上京に当たって抜擢された。首席家老として，琉球掛（かかり），御軍役掛，鋳製方（いせいほう）掛，唐物取締掛，造士館掛など重職も兼ねた。	35, 36, 37
石河　確太郎	大和国（現在の奈良県）出身の蘭学者であり技術者で，第11代藩主 島津斉彬が集成館事業を始めるに当たり招かれた。イギリスからの紡績機械輸入を提案し，鹿児島紡績所設置に重要な役割を果たした。維新後も，富岡製糸場などで技術指導に当たり，我が国の産業の近代化に貢献した。	89, 90, 92, 112, 113
松寿院（しょうじゅいん）	第９代藩主 島津斉宣（なりのぶ）の娘で，種子島家に嫁ぎ，息子及び夫の死去に伴い，その後，14年間にわたり当主不在の種子島家を支えた。港湾整備や塩田開発など種子島の産業振興に力を注いだ。	72, 98, 99, 102,
税所（さいしょ）　敦子（あつこ）	京都の歌人。京都詰の薩摩藩士に嫁ぎ，夫との死別後，鹿児島に赴き姑に孝養を尽くした。後に近衛家に仕えた。	8, 103
押川　栄（えい）	鹿児島の女性として最も早い時期に高等教育を受けた。明治９年（1876年）に県から派遣され，東京女子師範学校に入学。卒業後は幼稚園などで働いた。	107, 108
前田　正名（まさな）	16歳で長崎に留学，何礼之（がれいし）に英語を学ぶ。外国留学の資金づくりのため，兄の献吉，高橋新吉の３人で上海に渡り，『和訳英辞書』（通称『薩摩辞書』）を編纂・刊行。フランス留学の後，大蔵省・農商務省に出仕し，殖産興業に努めた。	115

【史料】

テーマ	史　　料	該当ページ
武士	• 「観光集」秋月悌次郎(鹿児島県立図書館蔵) 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士による記録	4, 7, 31, 38
	• 平田鉄胤(江戸の国学者)の書状等(黎明館蔵)	7
	• 「喜入家十七代大概之譜・十八代履暦荒増」 (枕崎市文化資料センター南溟館蔵) 薩摩藩の首席家老 喜入久高に係る記録	37
	• 「伊藤祐徳日記」(個人蔵, 黎明館保管) 出水郷の噯(責任者)であった伊藤祐徳の日記	44
市井の人々	• 「頴娃郷日帳」(黎明館蔵) 郷政の記録で, 商品作物に関わる庶民, 役人についても記載	51,64, 65, 66
	• 「守屋納一郎日記」(個人蔵, 黎明館保管) 高山郷の郷士の日記で, 幕末期の郷士や百姓の暮らしも記載	66
	• 「観光集」秋月悌次郎(鹿児島県立図書館蔵)〔再掲〕 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士による記録	56
	• 「月野村非常日誌」(曽於市大隅郷土館蔵) 西南戦争時に庶民が協力させられた様子などを記載	77
	• 「明治に於ける都城島津家日誌」 西南戦争で桜島に避難していた様子なども記載	78
	• 「市来四郎日記」(黎明館蔵) 斉彬に用いられ集成館事業にも関わった技術者の日記	55,86, 90, 91
女性	• 有村れんの書状(黎明館蔵) 海江田信義など有村兄弟の母の手紙	96 103
	• 山田歌子・税所敦子(薩摩藩士の妻。桂園派の歌人)の和歌	107
	• 押川栄の資料(黎明館蔵) 城下士の娘による県令への謝辞等	108
	• 「頴才新誌」 明治10年(1877年)創刊の青少年による投稿雑誌	
子ども	• 「観光集」秋月悌次郎(鹿児島県立図書館蔵)〔再掲〕 万延元年(1860年)に薩摩藩を訪れた会津藩士による記録	118,121
	• 「諸役, 文武館掛及郷校教官仰付書」(日置市吹上歴史民俗資料館蔵)	125
	• 「北條巻蔵備忘録」(新庄ふるさと歴史センター蔵) 明治9年(1876年)に鹿児島師範学校の教師として来鹿した現在の山形県新庄市出身者による記録	125

おわりに

この『明治維新と郷土の人々』は，2年間という限られた期間で取りまとめたものです。完成に当たっては，昭和43年（1968年）に設立された鹿児島県維新史料編さん所（現在の鹿児島県歴史資料センター黎明館）が編纂している『鹿児島県史料』に収載されている「玉里島津家史料」をはじめとする，貴重な史料群が大きく貢献しています。また，県内の市町村から提供された史料に関する情報も活用させていただきました。

本書を通じて，明治維新において薩摩藩がどのような役割を果たし，当時の鹿児島の人々がどのように生きたかについて理解を深めていただければ幸いです。

最後に，編集委員をはじめとする多くの専門家の方々に，貴重な御意見，御指導をいただいたことに篤く感謝申し上げます。

御意見・御指導をいただいた学識経験者

（50音順。敬称略）

猪飼　隆明（大阪大学名誉教授）
落合　弘樹（明治大学文学部教授）
佐々木　克（京都大学名誉教授）
寺尾　美保（東京大学大学院博士課程，元尚古集成館学芸員）
徳永　和喜（西郷南洲顕彰館長）
坂野　潤治（東京大学名誉教授）
三谷　　博（跡見学園女子大学文学部教授，東京大学名誉教授）
宮地　正人（東京大学名誉教授）
山本　博文（東京大学史料編纂所教授）

編集委員

（50音順。敬称略）

安藤　保（九州大学名誉教授）
犬塚　孝明（鹿児島純心女子大学名誉教授）
内倉　昭文（県歴史資料センター黎明館調査史料室長）
尾口　義男（前姶良市歴史民俗資料館長）
佐藤　宏之（鹿児島大学教育学部准教授）
所崎　平（鹿児島民俗学会代表幹事）
丹羽　謙治（鹿児島大学法文学部教授）
原口　泉（鹿児島県立図書館長，志學館大学人間関係学部教授）
松尾　千歳（尚古集成館副館長）
弓削　政己（奄美市文化財保護審議会長）

事務局（鹿児島県知事公室政策調整課）

課長　吉見　昭文
政策調整監　米盛　幸一
（米丸　剛）
政策調整員　永山　善徳
海老原廣達
松田　祐介
専門員　吉満　庄司
新福　大健
主査　（徳重　裕二）
資料調査補助員　加治佐亜矢子
小水流一樹
（早田　里佳）

（　）は平成26年度

明治維新150周年記念事業
明治維新と郷土の人々

発行：平成28年2月

鹿児島県知事公室政策調整課
〒890-8577
鹿児島市鴨池新町10番1号
TEL：099-286-2547
FAX：099-286-5590

印刷：渕上印刷　株式会社

※　本書の無断転載を禁じます。